

1257

特18

世界宗教會 206

# 演說摘要

紀元二千五百五十三年八月

西曆一千八百九十三年八月

非賣品

特

2

013695-000-3

特18-206

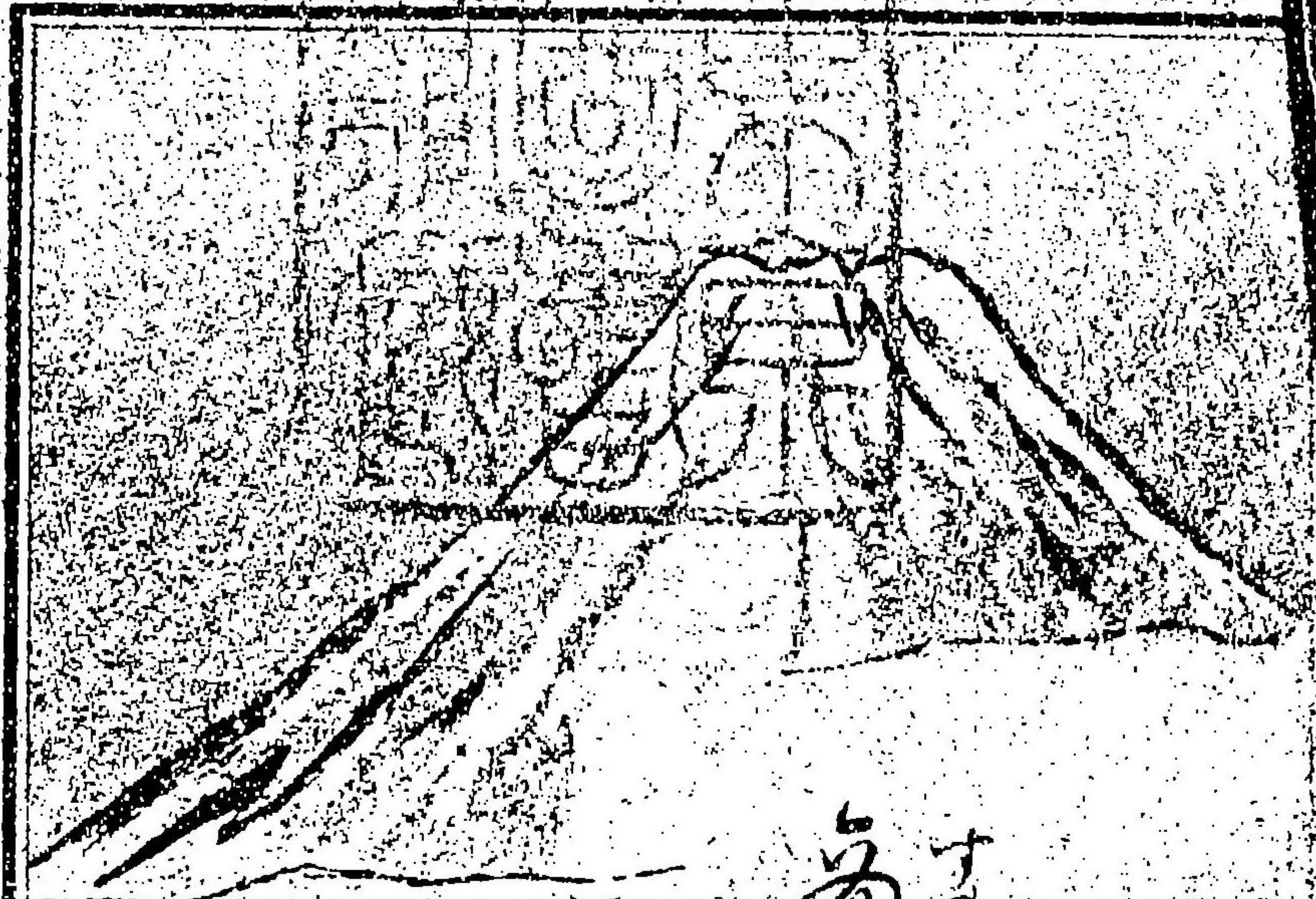
世界宗教會演說摘要

柴田 礼一 / 編

M27

ABA-0166





For the first time

the world

is open

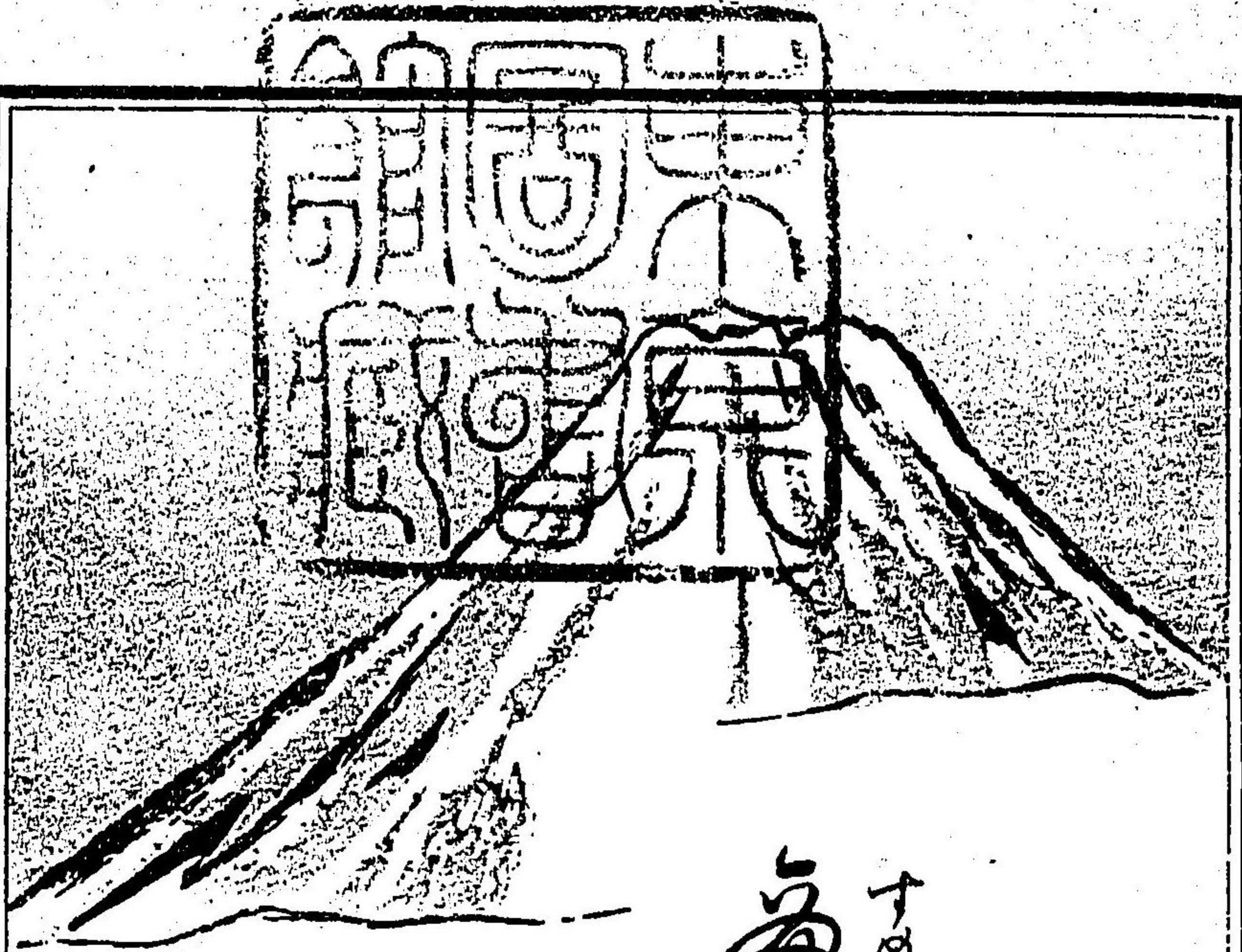
to all

peoples

and

all





Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a short inscription.

Handwritten text in a cursive script, continuing the inscription or signature.

Handwritten text in a cursive script, part of the main inscription.

Handwritten text in a cursive script, part of the main inscription.

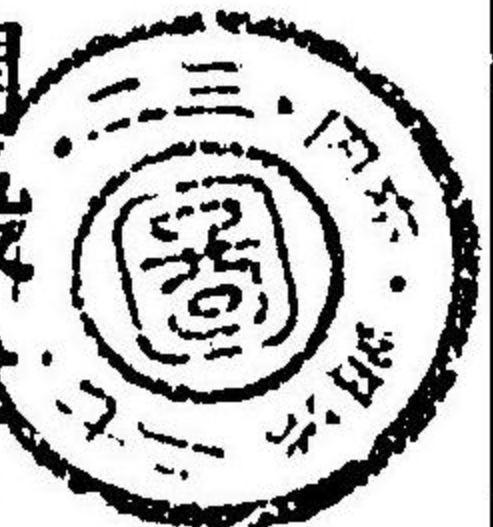
Handwritten text in a cursive script, part of the main inscription.

Handwritten text in a cursive script, possibly a date or a specific reference.



## 緒言

此書は、北米合衆國、イリノイス洲、シカゴ府に開設せし、  
コロンプス世界博覽會の好期に乗じ、世界宗教會議を  
開かんとて、同國神學博士、デヨン、ヘンリー、バルロース  
氏が、各國の宗教家に、賛同を請ひたる書信、並に、之に附  
帶せる、諸記事を、首め、其會に臨みたる、各宗教の代表者  
が、各奉ずる所の、教義を講演したるもの、及び、開會に對  
する、祝詞、演説、並に、諸國より、寄送せし、電信、論文等の中、  
重要な者を、蒐めたるものなり、蓋し、此大會は、千歳一  
遇の盛事にして、其の最も意を留むべきは、本會の目的



を記せる、條項中の、第二、第三、及び第十の、三項にありとす、  
 其第二に曰く、諸種の宗教は、如何なる、真理、及び、幾多の  
 眞理を包含して、之を共同に布教するかを、強く諸人に  
 知らしむること、  
 其第三に曰く、相互に、友情を以て交り、又互に、相知ることによりて、異種の宗教を、奉ずる信者間に、同胞心を起さしめ、又之を深くすること、若し夫れ、各派の利害、相聞せざるを以て旨とし、或は徒に、形式上、外面上の一致を、務むるが如きは、我輩の、目的とする所に非ざるなり、  
 其第十に曰く、列國の平和を、永久に保たんが爲め、地球

上の國民をして、一層親密ならしむること、  
 夫れ此の如く、彼の異教の徒が、己に發悟する所ありて、事の爰に出でたるは、豈嘉すべきにあらずや、宜なり、我皇國の、佛敎代表者として、某々數氏が、法袖を連ねて、奮發渡航したること、余が、不徳不才を省みずして、第一に、同感を通じたるも、亦義の止を得ざればなり、而して、余の論の、幸に、萬人に賛稱されたるは、眞に是れ、天ッ神の加護と、皇國の稜威とに、由らずんばあらざるなり、又不肖禮一をして、此の快事を、遂げしめたるは、一に、神靈の加護と、亡父花守翁の、遺徳に對して、巨額の資を惠まれたる、諸國の老教職、及び信徒諸君の、庇陰なりとす、而し

て、余は、之に酬ゆるに、只、一片の赤心を以てず、載て本書の中に在り、聊か之を以て、無事歸朝の、土産となすのみ、若く夫れ、渡米日記中の奇事珍聞の如きは、後日、布教巡回の時に於て、話説せん、

コロンブス世界大博覽會附屬世界宗教會議會長より送り越したる書狀の譯文

拜啓宗教會議の評議員として貴下御任撰相成候に付別冊證明書差上申候

此宗教會議は比較神學の一學校とも申べく是に依りて大に眞理を發揚し同胞の進歩を助くること我々の希望する所に有之候次に別冊第一報告書も併せて進達に及び候  
別冊御受取御承諾被下候に於ては御返事被下度又色々御心附の事共候半御報被下度候敬具

千八百九十二年六月十五日

宗教會議總委員會々長

デヨン、ヘンリー、バルローズ

北米合衆國イリノイス州シカゴ府  
インヂアンアウエニユー街二九五七番

日本 東京

神道實行教管長柴田禮一殿

(別紙)

拜啓貴下今般コロンブス世界博覽會附屬世界宗教會議の評議員に御  
任撰相成候に付御報申上候  
別冊は御一覽被下度候其中にて本會の性質、目的、組織及び評議員の特  
權義務の如何は御承知可被下候  
今回の御任撰に付ては何卒御承諾被下度本會は來る千八百九十三年  
の宗教大會議に於て貴下の感化、忠告、協力を得て利益を受くるあらん  
と固く信じて疑はざる所に御座候尙常書面に對しては何分の御返答

に預り度待上候也敬具

千八百九十二年六月十五日

助書記官

クラレンス、イー、ヨング

北米合衆國シカゴ府博覽會事務所

柴田禮一殿

(第一報告書略す)

右に對し同年九月卅日附を以て左の返書を發せり

拜啓千八百九十二年六月十五日附の御書面及び通知書拜見拙者を宗  
教會議評議員の一員と御任定相成候由委細了承仕候依ては拙者も千  
八百九十三年宗教大會議へ列席の覺悟に候間左様御承知被下度候

實は此度貴下御企圖相成候如き列國宗教會議は拙者が年來の希望に有之候處此理想的の企圖の愈々實行せられんとするを聞き満足の至りに堪へず候敬具

千八百九十二年九月三十日

日本 東京

神道實行教管長 柴田禮一

宗教會議總委員會々長

ヂヨン、ヘンリー、バルロース殿

(別紙)

拜啓此度拙者を世界宗教會議評議員の一員と御任定相成候旨御通知被下難有奉謝候

御書面の趣き委細致承知候此の大會の貴重なる目的に付きては拙者

も可及丈盡力可致積りに有之候先は貴答迄敬具

千八百九十二年九月三十日

日本 東京

神道實行教管長 柴田禮一

助書記官

クラレンス、イー、ヨング殿

左に掲ぐる宗教會議の目的は會長バルロース氏より各國宗教家に會合を請ふに就て豫め其目的の在る所を知らしめ而して修正又は加減を求めたるものなり

第一 本會の目的は今回初めて全世界中歴史上著名なる大宗教の重なる代議員の集會を催すにあり



第二 緒言に掲げたるを以て略す

第三 同上

第四 演説に最も堪能なる人をして各宗教及び耶蘇教派が自ら信奉し布教する所の重要にして特色を有する真理を一々説示せしむるにあり

第五 有神教の確固たる基礎を示し人が靈魂不滅を信する理由を明にし以て物質的哲學に反對する勢力を集めて之を強固にするにあり

第六 宗教が文學、技藝、商業、政治、民衆の家政及び社交的生活に及ぼす所の精神的若しくは他の影響は如何之を波羅門教、佛教、孔子教、波斯教、回教、猶太教、及び其他の諸教を代表する重なる學者及び耶蘇教諸派の代表者より十分に且つ精密に探知するにあり

第七 各宗教は世界の他の宗教に如何なる資料を與へしか又與ふるを得べきかを研究するにあり

第八 地球上重なる國民の信奉する宗教の現状を精確に調査し之を記録に明示して永く世に知らしむるにあり

第九 當時の大問題殊に禁酒、勞働、教育、貧富に關する問題は宗教に依りて如何に説明せらるべきかを有力家に諮詢して之を査覈するにあり

第十 緒言に掲げたるを以て略す

(右の外條件及び細則等略す)

世界宗教會列席者姓名一覽

總理	會長	書記官	秘書生	博覽會々長	露國國教	暹羅佛教	耶蘇新教	耶蘇新教	耶蘇新教	プレスビテリアン教會
神學博士					皇族	皇族	婦人館長	婦人會々長	女宣教師	某
チャーレス、シー、ボンチー氏	デヨン、ヘンリー、バルローズ氏	クラレンス、イー、ヨング氏	ウイリヤム、パイプ氏	ハイギン、ポーサム氏	ウールホースキー殿下	チャンドラダット殿下	パーマー女史	チャーレス、ヘンローチン女史	アンターベサント女史	女史

不詳

黑種婦人

フアンニー、ウイリヤム女史

不詳

印度婦人

ジエー、セラブジー女史

耶蘇舊教

獨逸伯爵

パンストーウ氏

耶蘇新教

獨逸伯爵

ウオーフストフ氏

羅馬舊教

大僧正

ギッボン氏

羅馬舊教

大僧正

フイーラン氏

耶蘇舊教

大僧正

ブラッドレー氏

耶蘇舊教

大僧正

デオニシヤスレータス氏

猶太教

大僧正

フリーハン氏

希臘教

大僧正

アシキヤン氏

耶蘇新教

僧正

レタス氏

耶蘇新教

僧正

キン氏

耶蘇新教

僧正

グランデン氏

耶蘇新教

大博士

マクスマニユール氏

耶蘇新教

ロバート大學長博士

ジョーシ、ワッシホルン氏

耶蘇新教

ハーバート大學教授

ライヤン氏

耶蘇新教

佛國某大學教授

モーソー氏

耶蘇新教

シカゴ大學教授

ジョーン、グード、スピード氏

耶蘇新教

シカゴ大學教授

ヘンダーソン氏

耶蘇新教

ロンドン大學教授

マイナス、シエラス氏

耶蘇新教

シカゴ大學教授

ウイリヤム、シー、ウイルキンソン氏

不詳

ハーバート大學教授

ピーポデイ氏

不詳

印度大學教授

チャクラーバーチ氏

不詳

某大學教授

マーウインメリースチル氏

不詳	某大學教授	チヤハラー氏
羅馬舊教	カソリック大學教授	フアザー、オーゴン氏
印度佛教		エツチ、ダンマパーラ氏
耶蘇新教	瑞典博士	カールボンベルゲン氏
耶蘇新教	米國博士	チヤーレス、エブリック氏
耶蘇新教	米國博士	ジエムス、プラント氏
耶蘇新教	博士	アラメツテ氏
耶蘇新教	博士	フイールド氏
耶蘇新教	神學博士	ゼームス、パーレル氏
耶蘇新教	博士	シヨセフ、クック氏
フィラデルフィヤ新教	博士	ポートマン氏
耶蘇新教	神智學會々員	ウイヤンキユーシヤッヂ氏

耶蘇新教	神學者	ホーエー氏
耶蘇新教		セトン氏
耶蘇舊教		ロツビーゴシエル氏
耶蘇舊教		アルフレッド、モメリー氏
米國ピユリタン宗		アレキサンダー、マツケンジー氏
アイデアリズム教	獨逸哲學者	アドルフバーヘック氏
プレスビテリアン教會		マクファーンソン氏
印度シエーン宗		ガンダイ氏
印度回教		プロタツプ、チヤンガー、マズームダー氏
回教		ウエツプ氏
不詳		オーガスタ、チユーピン氏
不詳		モーゾンタアー氏

特18  
206

天津耶蘇新教

カントリン氏

支那儒教

公使官一等書記官 彭光譽氏

支那儒教

クンシンホー氏

日本耶蘇新教

同志社々長 小崎弘道氏

日本佛教

臨濟宗管長 釋宗演氏

日本佛教

眞言宗中僧正 土宜法龍氏

日本佛教

天台宗少僧正 蘆津實全氏

日本佛教

眞宗肥後法注社長 八淵蟠龍氏

日本佛教

平井金三氏

日本佛教

野口善四郎氏

日本神道

實任教管長 柴田禮一

以下百五十餘名

### 世界宗教會演說摘要

神道實任教管長 柴田禮一著

明治廿六年九月十一日

此日を以て世界宗教會議開會の日とす、本邦より來會の佛教代表者は臨濟宗管長釋宗演氏、天台宗少僧正蘆津實全氏、眞言宗中僧正土宜法龍氏、肥後法注社長八淵蟠龍氏の四人ありて、神道よりは余壹人なり。隨從は僧侶共有の通譯者二人あり、余等一同馬車にて、ミチガハ湖畔のセント園内の美術館に赴く。館の宏麗、清淨は實に神聖なる宗教家の會合場たるに、適する者あり、暫時休憩、十一時導かれ、會場モロホヤホールに入る。列席せし人々の中にて、ローマンカソリック教の大僧正ギボン氏は、赤帽を戴き、金環の教證を胸間に懸

けたりしが、余は、雲鶴の祭服に、<sup>オサカシムリ</sup>桜冠を着し、曲玉及び教表を帯び、キボ  
 ン氏と相對して、席に就く、是れ當日、偶然の好對なりき、會長ボンチー  
 氏、婦人館長パーマー女史、婦人會長チャーレス、ヘンローチン女史、  
 ユーシーランドの大僧正、レッドサンチ島の、大僧正デオニシヤスレ  
 ーダス氏、シカゴ市のパロース氏、大僧正フリーハン氏、瑞典の博士カ  
 ールボンベルゲン氏、某大學教授チャハラ氏、錫蘭のエッチ、ダンマパ  
 ラ氏、印度のモートンターア氏、シカゴのオーガスタ、チューピン氏、ア  
 レキサンダー、マツケンジー氏、支那一等書記官彭光譽氏、其他の宗教  
 家、大約二百余名、整然椅子に就くや、一群の貴女等は、洋々たる、音樂に  
 伴ふて、定式の讚美歌を唱ふ、此日、聽衆六千人斗りあり、第一に會長ボ  
 ンチー氏、壇に登りて、開會の趣意を述ふると、左の如し、  
 諸君、我が亞米利加は、自由の國なり、殊に宗教自由の國あり、諸君よ、物質

的の文明には、先後あるも、吾人が、精神的の世界は、誰彼の差別あること  
 なし、茲に眞理を愛する者は、眞の宗教人種にして、國土風俗を異にする  
 も、一愛の下に、生育すること、兄弟の如く、相提携して、齊しく、安心立命の  
 地を、求めざるべからず、今や、時期到來せり、余は、滿腔の熱血を以て、諸君  
 の贊助を謝し、併せて、茲に世界未曾有の大會をシカゴ府に、開くを得た  
 るを祝す、

次に、登壇せしは、委員長、チヨン、ヘンリー、パロース氏なり、其演説は、左  
 の如し、

諸君、今回の大會は、坊間に有り觸れたる、演説會を以て、見ること勿れ、實  
 に歴史上に、特筆大書するに足る、未代不朽、且著明の、出來事と云ふべし、  
 秀山明媚の、日本より、地味沃饒ある、支那より、水色清淨なる、印度より、錫  
 蘭より、サイアムより、或は、地震に名高き、サンチ島より、其他、歐米の諸國

より、無慮十六種の宗教代表者が、來り會して、各々眞理を研究し、相互に、妙理を了解せん爲め、茲に大方諸君の贊助を経て、此の大會を開くものなり、幸に一宗一派の偏見を捨て、眞理世界に、相提携せられよ、茲に全幅の赤心を以て、各國宗教の代表者を歓迎し、併せて、諸君の幸福を祈る、本演說中は、終始大拍手、大喝采ありき、次て、大僧正フイーラン氏が、歡迎文は、左の如し、

各宗代表者諸君、及び、來會滿場諸君、今日世界各國より、來會されたる、賢明ある、諸代表者は、各々説く所を、異にすと雖ども、然れども、一として、相愛を説かざるものなし、此の相愛の一念、以て四海同胞の、一大家族を、形造るを得べし、茲に諸君の健康を祝し、併せて、本會の、成效を祈る

拍手喝采を博せり、次に、「ローマン・カソリック」教、大僧正、ギボン氏、演舌の大意は、左の如し

諸君、此迄各宗教は、其取る所の方針、相異ありと雖ども、義を重んじ、愛を博くし、徳を慎むを、教へざるものなし、此の博愛主義は、社會組織の、要素なり、此の博愛、以て各派の偏見を破り、頑迷を醒すの、利劍となすを得べし、云々、

次に、余が英譯の祝文は、議長バルローズ氏、余の傍に立ち、代りて朗讀せり、其大意、左の如し、(此時會場の正面に余が持ち行きたる富嶽の掛物及び神代文字の掛物を掲げたり)

此度、當シカゴ府に於て、世界宗教大會議を、開かれたるは、古今未曾有の、盛事にして、實に、發起者諸君の、博愛と、耐忍とに因りて、生じたる結果にして、敬服の至りに堪へず、余は、日本に於て、明治十三年、即ち今より、十四年前、

全世界宗教家の懇親會を望むと云ふ演説をなせしことあり、當時は、全く理想上の、話説なりしが、這般實地に、此の盛大なる會議に列なるを得て、我希望を達することを得たるは、寔に望外の幸榮と謂ふべし、回顧すれば、往時數千年間、宗教の問題に關しては、或は論難し、或は競争し、甚しきは、爲に戰鬥に及べることさへありしに、時移り、物變り、世界の進歩に伴ふて、各異の宗教家も、斯く萬里の波濤を越へて、此大會議に臨み、互に親睦して、談論するを得るは、獨り宗教、其物の爲めに、喜ぶべきのみならず、又、世界の人事上、大に祝すべきことなりとす、此會や、一會より二會、二會より三會と、連綿相繼ぎ、其間

に於て、宗教家互に、親愛の好を締ムスひ、共に理義の奥を究め、兼て、世界の平和を計らば、區々分立せる宗教も、相結合し、尠シや敵視せる邦國も、相和合して、全地球の、靜謐を保ち、福祉を増し、真正完全の、大公道に、歸着すること、必しも庶幾しがたきにあらざるべし、

幸ひにも、満場の拍手喝采を博せり、次にオーガスタ氏祝辭あり、之に次で登壇せしは、博覽會々長、ハイギンポーサム氏なり、其祝辭は、左の如し、

博覽會を代表して、卑辭以て、各國來會者諸君の健康を祝す、此の幼稚なるシカゴ市にて、歴史上未曾有なる、精神的の開會あるは、豈喜ぶべきに非ずや、殊に博覽會開會の、當年博覽會史に、榮爛たる、光輝を副ふるもの、



豈博覽會々長として、祝し、且謝せざるべけんや。

次に登壇せしは、アレキサンダー、マッケンジー氏にして、ヒュリタン宗の代表者あり、

諸君、當壇に立つ學者、及び雄辯家は、皆各々代表する所のものあり、而して余は、當亞米利加建設の、最も古き、殖民者を代表す、諸君、色黒き服装と、野鄙なる辯舌の故を以て、嘲笑する勿れ、余の如きは、眞に百姓宗教者の、代表者と云ふべし、然れども、此百姓は、亞米利加の、獨立共和國を起して、今日の盛大を致せり、此殖民者の、子孫たる、何ぞ、振ひ進んで、宇宙の爲めに、精神的、共和國を、形造らざるべけんや、之を造るの糧食は、相愛なり、四海兄弟なり、幸に、人種、國体、宗教の異同を問はず、精神的の共和國を、形造り、一屋の下に、相樂まざるべからず、余輩、ブリマウスロッシンに、上陸せし、祖先の故事に倣ひ、之が先導となるを誓はん、諸君、乞ふ翼賛せよ、

次に、獨逸の伯爵、パンストーフ氏、露國皇族、ウールハウスキー氏、支那書記官等の、祝辭ありて、印度のエッチ、ダンマパーラ氏、及び佛國大學教授、モーンソー氏の、演説あり、茲に小憩を告ぐ、余等皆歸宿す、

九月十二日

聽衆男女、無慮四千名、此日第一に、登壇せしは、大僧正アシキヤン氏にして、猶太教に付き、演し、次は、印度大學教授、チャクラーパーチ氏、印度の哲學に付き、演ず、其他二三氏の、演説あり、次に、獨逸哲學者、アドルフ、バーヘッソ氏、登壇し、述て曰く、

余が宗は、新宗教、新信仰にして、「アイデアリズム」(唯心教)と名くるものなり、余は、靈魂不滅の、希望あり、極樂なく、地獄なく、又神あるもの、存在を信ぜず、認めず、云々、

九月十三日

此の日、聴衆頗る多く、實に六千人餘と云ふ、重なる演舌者は、印度學士  
プロタップ、チャンガー、マズンダー氏、希臘教大僧正レタヌス氏、支那儒教  
彭光譽氏、我佛教徒野口善四郎氏、同平井金三氏、及余の六人あり、何れ  
も熱心に、其奉信する所を演じたる者なれば、一として通讀の價直な  
きに非ずと雖も、徒に紙數を増すを以て、議長バルローヌ氏に委して  
演ぜしめたる、余の演說の原稿を掲げて、他は皆之を省略す

今回、此のシカゴ府に於て、閣龍世界博覽會、附屬として、  
世界宗教大會議を開かるゝや、非才淺學の余も、亦評議  
員の一人として、此席に列するを得たるは、實に望外の  
幸榮なり、是に於てか、各國宗教代議員諸君の、高論卓說  
を謹聽し、又日本帝國の神道、就中、我實行教の、要旨をも、

述べんと欲す、

我神道とは、其字義より云へば、神の道、即ち、日本帝國の、  
祖神より傳はりて、邦人の舉て履み行ふべきの道なり、  
此道や、我歴史に基き、地理人情に依りて、古來傳承した  
るものにして、萬世一系の帝室、及び國體と共に、其源を  
同くし、之れと共に、長久にして、離るべからざるものな  
り、我古典に據るに、世界の初に、神祇ありて、天地、萬物、及  
人類を、生み玉ふ、殊に伊邪那岐、伊邪那美の男女兩神、此  
下土に、天降り玉ひ、其地を、修理固成して、國土を經營し、  
諸神を生み玉ひしが、中に就きて、天照太神は、靈異の神  
にまゝませば、天上高天原を、知ろしめされたり、天照太

神は、其皇孫、邇々、藝命に親ら、八尺勾璫、八咫鏡、及、草那藝劍の三種の神寶を授けて詔はく、葦原瑞穗國は吾子孫の王たるべき地なり、寶祚の隆にまさんと天壤のむた無窮と、祝し玉ひ、又、天兒屋根命、天布刀玉命等を配へ侍らせて、葦原瑞穗國、即ち我日本に、天降し玉ひ、其主となり玉ふ、是則ち、皇統連綿として、相紹續き、君臣の分、一定して、離るべからざる所以なり、邇々、藝命の皇孫を、神武天皇と云ふ、人皇一代の天皇にして、我日本を統一し、首として、皇祖天神を祭りて、大孝を申へ玉ふ、其後、歴代天皇、皆祭祀を重し、政治を敷き玉ふ、臣民も亦、此意を体し、敬神尊王を以て、義務と爲せり、人皇十五代、應神天皇の

時、儒教始て傳はり、廿九代、欽明天皇の時、佛教初て傳はり、近世に至りて、基督教漸く傳はりたれども、我國民は、曾て、神道敬神の大義に、違ふものなし、然して、祭神の儀式等は、現今に至るまで、上古の制に則とり、就中、天祖傳來の三種の神寶中、勾璫は、天皇の宮中に、齋き奉り、神鏡は、伊勢大神宮の神靈と仰ぎ、神劍は、尾張、熱田神社に、齋き祀れり、天皇親ら、宮中に於て、天神地祇を拜し、及、歴代の皇靈を、祭り玉ひ、各地に、數所の、官弊社ありて、全國人之を祭り、其下に、國弊社ありて、一國之を祭り、其下に、郷社、産土神社ありて、郡村之を祭る、然して、其神として、齋き奉るものは、皇祖、皇宗以下、國家に勳勞ある、忠臣、賢相、

若くば、武將及び一地方に、功績ある、義士偉人等にして、皆我邦人の祖先として、仰ぐ所なり、其子孫たる者は、諸神社の、ウヂ氏子として、最近の郷社、産土神社に詣で、併せて、他の諸神社を祭る、其祭日には、職業を休み、同郷者は、相協力して、祭儀を營み、國家の安全を祈る、此神道は、實に、我國特有の、美風にして、皇室の無窮、臣民の忠實、國家長久の根本たり、

我國家に、連帶せる、神道の、大義は、上に述ぶるが如く、日本の國民たる者は、悉く皆、履み行ふべき道なりとす、是より、余が奉ずる、神道實行教の、教旨と、來歴の大要とを、説明すべし、

抑、余が奉ずる、實行教とは、其教名に、示すが如く、虛文虛飾を去り、空理空論に走らず、専ら實行を旨とし、其説く所は、簡易にして、諸人に理解し易く、人の人たる道を、實行するを、教ふる一新派にして、時に應じ、世に隨て、漸次に、改良したるものなり、我教の奉ずる神は、多神ならず、則ち古事記、及日本記等に、傳ふる、天地生發の初に、單獨の眞神あり、天御中主神と申す、此神は、天地萬物を生み出し、之を主宰する、神にして、天地に、先ちて存し、終る所なきものなり、此一眞神の、大元靈、發動して、男女の徳性を、備へたる、二神に、別れ玉ふ、之を高皇産靈神、神皇産靈神と申す、此二神は、一眞神(天御中)の用(ハタケ)に、外ならずして、

又、一神に歸する者なり、之を造化の三神と名づけ、我教徒は、單に、元の父母オホノミコと稱し奉れり、而して、我教は、此主宰神の所在を、我日本帝國の名山、富士山なりとなす者なり、蓋し、此山を以て、此地球の腦髓と認め、世界の神靈は、此の腦髓に、舍らせ玉ふものとなす、然して、人類は、特に、此の眞神の、分魂シヅメミタマを戴きて、生れたる者にして、乃ち眞神最愛の子なれば、所謂神隨カムナガラとて、眞神の規定のまゝにして、又、諸事國鎮たる、富士山に則りて、身を修むる者とす、例之ば、富士山の、玲瓏たるが如く、其身と、心とを、清潔にし、又、此山の形容、四面同一なるが如く、何事も、表裏なからんとを、期するの類なり、我教の重んずる所は、來世に非

ずして、現世の實行にあり、故に、我信徒は、先に皇統の、無窮を祈り、次に國民の、安寧を禱り、徳は孝を以て、本とし、行は分を守り、業務を勵み、宗教の自他を問はず、讎に酬ゆるに、恩を以てし、國民協力、相助けて、諸般の公益を謀り、以て神恩、國恩に報せんとするの外、他念あらざるなり、次に、教派の傳統を、概述すれば、我實行教の開祖を、長谷川角行靈神と稱す、千五百四十一年(我紀元二千三百〇一年)肥前國、長崎に生る、當時我國は、内亂止むときなく、或は天變地妖あり、或は饑饉疫病あり、上下の困苦、實に甚しかりき、開祖、深く之を慨歎し、十八才、初て家を出で、徧く、天下の靈

十八  
場を、巡拜す、其の富士山に到るや、或は麓の人穴ヒトツナに入り、  
或は絶頂に登りて、祈願し、終に神の感應に因て、該山は、  
眞神の所在なるを大悟せり、是に於てか、一新教派を  
開きて、海内に布教し、天壽百六歳、人穴の中に於て、神逝  
したり、是より、其教義の傳ふもの、十代に至て、大に中興  
す、是を柴田花守翁と曰ふ、翁は則ち余の父なり、家翁は、  
千八百〇九年（我紀元二千四  
百六十九年）を以て、肥前國、小城に生れ、恰  
も開祖と同しく、十八歳にして、此教に入り、其師三志翁  
に、隨從して、天下を周遊し、其學ぶ所、神儒佛の三道に、通  
曉せり、偶、明治維新の時に、遭遇するや、其齡六旬なるも、  
東奔西走して、斯道の擴張を勗め、傍ら書籍を著はして、

微妙の教旨を明に、以て、文明時代に、適應する、一新派  
の國教となし、其の教名の、不二教と云ふを改めて、實行  
教と名けられたり、千八百九十年（我紀元二千  
五百五十二年）に卒す、享年  
八十二、余は其跡を嗣げる者なり、  
以上、我教の教旨、並に開創以來の、概畧なり、是より余は、  
宗教上、兼て抱持せる、卑見を述べん、我教義に隨へば、天  
地間の物、皆三神の生下する所なれば、人類は勿論、諸の  
動物、植物若くは、金石に至る迄、悉く其徳を、具へざる者  
なし、就中人類は、其最愛の子なれば、神に對して、博く之  
を愛し、互に相輔助し、相提挈すべき、義務を負ひ、異人種  
異宗教と雖も、之を厭忌敵視すべからざる者とす、願ふ

に、各國の宗教、其根本を追究すれば、果して同一の原理を含まむと疑ひなからん、然ども其枝葉の、他の人事の如く、其國の歴史、地理、人情等に應じて、殊別なる所は、之をして、合同一致せしめんとするも、所謂言ふ可くして、行ふ可らざるものたるべし、故に今日の急務は、唯、各宗教、互に相敵視する、固陋心を消散するに在り、次に各自、宗教の上に存する真理を、比較研究して、原理の中心點に於て、互に相和し、相合するの道を、求むるに在り、而して、吾人は、神の意を受け、世界公衆をして、各安心立命の地を、得せしむるの、義務を、盡さざる可らず、  
余は、語を結ぶに當り、更に一言を付せんと、欲するもの

あり、此の一地球に、星散する人類は、同く、一眞神の愛子なれば、其同胞は、一致和合して、苦樂を共にすべきは、神慮の望む所に、して、之に仕ふる宗教家が、宜しく任じて、先導すべき所なるべし、然るに、熟ら、今日の現状を見れば、各國未だ、野蠻の流弊を、脱する能はず、動もすれば、瑣末の事項を、口實として、他の弱國を、侵凌し、償金を責り、國土を奪ひ、其民をして、塗炭の苦に、陥らしむると、往々にして、之あり、是れ豈、神の許す所ならんや、之を救ふの道、如何せば可ならん、余が多年、切望する所を以てすれば、各國の陸海軍を全廢し、更に世界協同の、陸海軍を編製して、東西兩半球に、二大鎮臺を置き、又兩球の要所

に、分營を置いて、全世界の警備に充て、以て無名の戦争、不義の侵略を、絶んとを望む、又國際の爭議を、審判すべき、各國連合の、無上大審院を設けて、各國の曲直を、無私公平に、審判せしめ、以て國として、非道の處理を受くるとなからんとを望む、斯の如くなれば、獨り各國の、徳義を完くするのみならず、國家經濟の、大部分を占むる、陸海軍費の、債額を減却するを得て、國富み、民豊かに、文明開化の實、一に之に由て舉らん、是實に、本の父母、則ち眞神の、神慮なるを知るなり、

以上は、余が、年來希望する、理想なり、諸君の胸中にも、亦必ず、此の事あらん、只此希望を、果さんと欲せば、各國の

宗教家が、此の主義を一に、奮て其國上下の、人心を勸誘し、漸々、國と國とを、一にして、敵意を散せしむることを、謀るに在るのみ、其の之を爲んとするには、須く先づ、自家の宗教をのみ、是として、他教を、非とするが如き、陋心を去り、我邦に立てる、富士山の向ふ所、表裏なきが如く、八面玲瓏たらんことを望む、

述べ終るや、樓上樓下、六千餘の老若男女、總起立、拍手喝采、湧くが如く、  
「ハンカチーフを振り、余に向て、蠟集し來り、握手を乞ひ、或は衣冠を戴き、或は手を嘗むる等、筆舌の盡し能はざる程にてありき、議長纔に道を開き、休憩室に誘導したり、

九月十四日



此日は「ローマン・カトリック」大僧正ギボン氏の演説ある筈なりしが、不快の爲め代理として僧正ビョフキン氏大僧正の論文を朗讀せり、流石は雷名四海に轟ける氏の論とて其意透徹才藻絶羣媿々數萬言の長文章要を摘して左に掲ぐ、

吾人が生存せる十九世紀の文明は「カトリック」の賜なり我キリスト教的文明より生ずる恩澤は天に充る空氣の如く日光の如く地の生ずる果實の如く一般平等に文學的に道徳的に社會的に溢れて到らざる所ありしキリストの降誕までは鎖閉されたる羅馬の一小部を除き世界一般に偶像崇拜暗澹たる穴中に埋没せられぬ世は日月星辰を拜しぬ彼等は情慾を拜しぬ換言すれば彼等は全知全能の神宇宙萬有の造化を拜せず腐敗し易き造り物を信じぬ然るに茲にキリスト來れり、  
イスマエルの豫言者があげき且祈りし「キリスト」は來れり來りて世人

に唯一眞神を説く此神や其力能く宇宙萬有を造れり此神や慈悲圓滿靈知靈能神聖にして犯す可らざる者なりキリスト降臨までは人は一定の見識なく迷を出て迷に入り夢を解て夢を結ぶ如く其自ら何れより來りしや何れに往くべきものなるや實に暗夜に灯を失せし如く大海に羅針を失ひしが如し人の知る所は其生れて死するまで只長からざる苦痛煩悩の世界たるを知るのみ過去未來の如き高妙なる哲學の光も尙照す能はざる雲霧の中に藏れぬ然にキリスト出でて眞神の光明を發揮するや魑魅魍魎直に其影を收め爰に始て神人の關係定り人は未來に於る安心立命の地を得るに至れり然れども其教の擴張されし元の都は「カトリック」教なり「カトリック」教の開基として擴張されしキリストの福音は只に智慧に光を與へしのみならず又靈魂に希望を與へたり吾人に神の平和即ち吾人の良心より發起する平和を與へた

り、吾人に三位一躰を教へて、此世からなる極樂を説けり、彼の十誡を守りて天帝に近づくとを得へきを教へり、他人に慈悲と正理を推して平和を守れど教へ、我情慾を慎み、神の教を守りて、一家の團樂を形造れど教ゆ、キリスト以前の教は、其教理狹隘淺薄なれども、キリストの初めて開きし「カソリック」教は、世界教なり、一視同仁教なり、人種、言語、風俗、風土の差を問はず、集めて其德澤に浴せしむるものなり、這般の世界宗教大會議は、熱心思慮ある人々、各宗教上の本旨を述べ聞かせ、自らの開悟を以て満足せず、他をして亦満足せしめんとするものに外ならず、余も亦神の恵に依りて得たるこの賜を諸君に分配するに吝ならざるべし、眼を開て見よ、我宗が社會になしたる効果を、我宗は社會を利せし親玉なり、我宗のみならず、世界の宗教殊にキリスト教内の他教派が、其信ぜらるゝ社會に與へし利益は、決して尠少あらざれども、今假りに我宗

が社會に施せしを列舉せん、我宗は神人の關係を説けり、キリスト教理に依りて人世風俗の艱苦を脱して未來の希望を教へたり、婚姻契約を授けたり、人生れて死するまで權利の安固あるを説けり、男女少年教育の爲めに、併せて老衰據るなきものゝ爲めに、育兒院、救貧院を建たり、病者の爲めに、病院を設けたり、墮落婦人懺悔の爲に懺悔院を設けたり、奴隸買賣廢止に力を致せり、勞働社會に向ふも常に無二の友たりき、以て見るべし、我教は一視同仁教たるを、一視同仁の主義を擴張し、四海同胞を見る爲には、全力を盡さざる可らず、人として其隣人を助くるの義務を神より受けざるの人はなし、吾人をして謝せしめよ、吾人互に其の信する宗旨を異にすれども、吾人が提携並び立の餘地は、吾人を隔てなく待つを、此の餘地とは慈愛恩惠なり、吾人の不能實にキリストの如く盲目をして視せしめ、聾者をして聞かしめ、啞者をして言はしめ、瘖者を

して立たしむる能はずと雖も、吾人庶幾は隣人同胞が、苦患の幾分を匡救するを得ん、吾人の隣人の苦を救ふの、神に一步を近くなり、暗澹荒漠たる無宗教心に、徳光燦然たらしむるは、神に一步を進むるなり、嘗て涙なく、血なく、不毛荒蕪心に希望の花を咲かし、實を結ばしむるは、神に一步を進むるなり、吾人をして相提携して兄弟たらしめよ、否シセロの云ひし如く、人の神に近く、の道は、隣人の幸福を進むるに若くはなしと云ひし如くせよ、云々、

夫れより、二三氏の演説あり、一時休憩後、ホストンのヘール氏博士、ク川氏等、登壇演説す、次に登壇せしは土宜法龍氏あり、演題は「佛教」と云ふ大意に曰く、

人は己の心より、己の罪にて智光を包めるを以て、佛の教理を摸範として、己を修めざる可らざるあり、己に修養功成りて真如の月を認めば、最

早心、佛、衆生の差別あく理法一體とある、蓋し真如の月は一のみ、今日史で相仇視せし、無明長夜の雲暗れ、唯一無二の月に照されて、一視同仁世界兄弟を形造るを得ん云々、

九月十五日

是迄は、各國諸氏の演る所、只其自ら信ずる宗教の原理を、布演するに過ぎざりしが、本日始て比較宗教に關する、意見を述べたり、其第一席は、シカゴ大學教授ジョーングラード、スピード氏にして、論題は「死せる宗教何をか現存宗教に遺せしや」と云にあり、其趣意左の如し、

諸君、地球上現在の宗教、實に千差萬別なりと雖も、決して孤立する者に非ず、皆多少の關係を有せざるはあし、而して既に絶滅したる宗教と雖も、猶現存の宗教に、遺す所のもの淺少に非ざるあり、凡そ宗教の組織せらるゝや、必ず各其據る所の真理あり、或は少くとも、真理の要素あり、若

し此眞理を含有せずとせんか、焉が人類の望を繋ぎ、久しく其尊崇を受るを得んや、古代宗教中に存在せし眞理は、代を経て今日に至り、終に稍進歩したる、現在宗教の基礎を形成したりと云ふ可きなり、彼のアッシリヤは、古代の文明國にして、其の滅亡以來、茲に數千年の年所を経たり、而して吾人は、認めて以て此國微りせば、社會今日の狀態、得て望む可からずとなすに非ずや、古代文物制度の、遠く現社會に影響を及ぼす、此の如し、何ぞ獨り、人心を支配する宗教の、此法則の外に出るの理あらんや、古代の宗教微りせば、宗教現時の狀、亦望む可らざるや、明なり、此故に、古代の宗教中、至當にして人生に適合するの教義は、後世稍進歩したる宗教中に吸収せられ、之をして愈完全ならしむるを常とす、是れ吾人が、印度各地の宗教に就て見る所にして、夫の回々教の、亞拉比亞古代の宗教を併合し、又耶蘇教の各地に散在せし異教を、改造合致して、以て其教義

とせしが如き、亦其適例と云ふ可し、夫の既往の宗教が、如何なる遺物を残せしやと、研究するの目的を以て、現時の宗教を解剖分析することは、實に比較宗教範圍内に於ける、最も紛雜にして、且最も大切なる事業あり、而して余は、種々比較研究の結果として、宗教には概して、二の普通の證據あることは、疑ふ可からざるの事實と信ずるに至れり、二の證據とは、即ち第一、人類が認めて以て神を必要とする事、第二、人類は神を認知するの力を有する事、是れあり、云々、

次にコンスタンチノープルの「ロバート」大學長博士ジョーシ、ワッシホルン氏登壇、耶回兩教の異同を陳ふ、曰く、

余の目的は、回教の辯護にもあらず、批評にも非ず、只不偏不黨の目より、回教と基督教との異同を辨ぜんとするにあり、回教は、重に天使ガブリエルに依りて、屢々彼の大豫言者マホメットに渡されたりと傳ふる、「コー

ラン「神文と、マホメットの性質言行の記録に關する口碑傳説、及「ヘガイラ」紀元百年代頃の有名なる神學者の説に基く所多し、マホメットは耶蘇、猶太兩教聖書を通讀せしや否は、知る由なしと雖も、神語として之を承認せし事は疑ふ可らず、而して「コーラン」經典は、形式上七條の教義ありとし、其信條は即神、天使、聖書、豫言者、裁判日、善惡に關する全能の神の、永遠不滅なる規定、死後の復活等、是れなり、猶回教信者の敬信する條項ありと雖も、以上は其最も大切なるものなり、吾人は實に一人の天父を有せり、而して四海同胞の實を得て、洋々和樂の中に、生活を爲さんことは、吾人の共に欲する所なり、而して猶特に吾人が、日夜希望して止ざるものあり、眞理の何たるを知ること、是れなり、吾人は善惡を惡み、之を退けんと欲し、又神國の來るを喜ぶの情に於ては、宗旨の異同に關せず、共に同一なり、然れども、眞理の何たるや、又如何がして吾人が、神國に入るやの、

問題に就ては、未だ一致する所なし、而して又、眞實なる回教信者、及び耶蘇教信者も、此二教は其大旨に至りては、全然相合することを知らず、又少しく讓る所あれば、二教合致の實を得ることを信するものは、絶てあらざる可し、吾人は、唯だ猜忌の情を去り、虚心平氣なれば、始めて能く、共有の目的に對して、協力し、能く眞理の、何に存するやを、判するを得るのみ、云々、

次に貴婦人順次登壇す、比較宗教上の論題なれども、回、耶兩教に關すれば、茲に略す、午後支那人「シンシンホー」なる人の「孔教」と云ふ論文の英譯を、ウイ、ヤム、パイ、フ氏、朗讀す、其大意は、

夫れ、士の修む可き所のもの、一にして足らずと雖も、其中最も必要あることは、戦々競々として、大道に背かざるにあり、是を以て孔教は、天道を守るを以て主となす、易に曰く、世の變遷中に、千古不磨の一大精氣あり

て、陰陽の二氣を生ずと、此一大精氣は、凡ての元氣の源泉なり、我朝古聖賢哲、此陰陽と五元とは、互に間斷なく、相助け、相働くものなりと云ふ、其必要なること、門戸開閉の蝶番フラップの如く、萬物の發生、亦此に因る、猶樹木の根幹に於るが如くしかり、而して、人事の變化、善惡の交替、亦皆此の二氣五元の結果に依らずんば非ず、茲に於て、吾人が地球の南北極と云ふが如く、此氣元を最上極と云ふ、此陰陽五元の産する所の精なるものを人となし、其餘は皆不精なるものとす、此精撰中の上等のものを、聖人賢人とし、下等のものを、愚人若しくは悪人となす、吾人の体は陰より生れ、精神靈魂は陽より生ずるを以て、吾人は完全なること能はず、是即ち哲學者の、物質性と名つくる所のものなり、假令吾人は、本來生れ得て、清淨良好の善性を有するも、若し之をして固定せしめずんば、情慾内に萌し、害惡到らざるあくして、下等動物と撰ぶ所あるからん、故に孔夫子云へるわ

り、人の性は元と一あり、交る所に依て變ずと、聖人此に觀るあり、仁、義、禮、智、信の理を以て、人を治むることを務めたり、天は帝を立て、以て萬民の師とし、帝王は命を受けて、以て天下に君臨す、此に於て、禮を制し、祭典の法を定め、以て善を勧め、刑を設けて、以て奸惡を懲す、而して人倫五常は、天下の大道にして、一日も廢す可きに非ず、夫れ明君上に在り、賢相内に補けば、治道明に、治蹟求めずして舉がらん、親は慈に、子は孝に、長は友に、幼は悌に、夫は愛に、婦は從ならば、一家團欒の快樂、求めずして得らるべし、若し其友と交る、信切を旨とせば、社會の平安も亦期すべし、孔教の大目的、大主眼は、唯是れ修身、齊家、治國、平天下にあり、而して此教能く我國に行る、是れ即ち、大古より今日に至るまで、變ぜず、動ぜずして、我國孔教の重んぜらるゝ所以あり、然して、孔教の亂神怪力を誦らざる所、最も妙味あるを知らざるべからず、云々、

次で二三氏の演説あれども、略す、同夜七時より開會、魯國皇族ウオル

ハウスキー公、并にサイアム國皇族チャンドラダット公の演説あり、後

者の演説は左の如し、(但し代人)

我國に於ける佛教は、吾人に教へて曰く、宇宙間、森羅萬象、悉く「ダーマ」より發生するものありと、蓋し「ダーマ」は、梵語にして、天然の元氣の意なり、「ダーマ」は人にありては、三ヶの顯象として現はる、即ち第一に、永劫進化の整備、第二、人の思念に従ふ苦難、第三、人の欲望に依り左右すべからずして、人に屬せざる一の別働隊として現はる、而して「ダーマ」は色心よりあり、永劫不滅にして、始めあることなく、終りあることなし、而して、色は外界活物及び人の肉體の部を成し、心は人間の精神、靈魂を成すものあり、而して、夫の三現象互に結合して、形體を成し、人間の知覺、感情等を生ず、夫れ、貴賤貧富の別なく、苦の大あるものは死あり、而して吾人が苦痛

を避るの手段は、たゞ一に「ダーマ」の何たるを知覺し、自ら意思、行爲に由て、人の眞性は、佛の吾人に授けたる、夫の四諦に従ふに非らざれば、之を得可らざることを悟るにあり、人は肉體的の幸福を希ふことを止め、人生は元と空々寂々として、有爲轉變恃むに足らざるを知らざるべからず、是を以て眞の佛徒は、今及今より以後に、樂むべき肉體的快樂の爲めに、自制自克の徳を傷けざるなり、佛教四諦の一は苦あり、生も苦なり、老も苦あり、死も苦あり、疾病も苦なり、貧困も苦なり、愛する所の者に分るゝも苦なり、己れの欲せざる所に交るゝも亦苦なり、人世何事か苦ならざらん、而して換言すれば、我は苦の元にして、我を成す色心は、即ち「ダーマ」を組成する色心なり、貧困、病死、不幸若し人を襲はんか、之を忍ぶは佛徒の務あり、而して此等が、人に由て發生せんか、則ち其源を究め、之に處するは、固より其義務なり、慈悲、忍辱は佛者の義務、本分あり、若し其現世行

爲にして、其不幸の源因たるを證するなくんば、彼は之を前世の業果と諦めざる可らず、凡そ飲酒は、人を愚昧、狂暴、佞惡に陥るの媒介たれば、佛徒たる者、宜しく謹んで節せざる可らず、云々、

九月十六日

演説に先ちて、博士バマツス氏、カルカッタある「ブラモンソマシ」會より、本會の開會を祝する海電を朗讀す、滿場大拍手、大喝采、印度人にて回教第一の名士、マズームダール氏は、直に登壇し、感謝の意を表して曰く、「諸君、余は、余が同郷人士が、茲に此大會を祝する爲め、全幅の赤心を以て、此海電を、斯くの如き遠路より、送り來りしを見て、欣喜雀躍、手の舞ひ、足の踏む所を知らざるなり、余初め謂へらく、東西半球晝夜を異にし、相隔つる其間、唯高山、大海、之を隔るのみあらんやと、然るに眞理を喜ぶの眞心は、東西一徹にして、今茲に我本國教會より、此大會を祝するの電信に

接するに當り、茲に同朋相携へて、諸君に見ゆるの感なくんば、あらず、滿場喝采、續て登壇せし辯士、其數殊に多く、第一の辯士は、ニユヨークの人、博士チャイレス、エブリック氏にして、バルロース氏を紹介するの辭に曰く、

余は、今、其深遠なる學術と、其教の忠勇なると、其眞愛すべき誠實との爲め、世界に驍名を轟かしたるの名士を紹介するを喜ぶ、云々、

博士は、聖書の誠あることに就て、一場の演説をみせり、今其熱心なりしと、聴衆の満足せしとに愛で、左に其大意を掲げん、

世界中の歴史的宗教は、皆聖經を有して、之を神の託宣と云ふ、其中最秀たる者を、耶蘇教の聖書とす、而して又最も深く、人心に勢力を有するものも、亦耶蘇教聖書とす、今日に至りては、此等種々の聖書を得ること、甚だ容易にして、從て教義を研究し、其優劣を比較すること、亦易々たり、余



思へらく、他教聖書は、猶暗中の松明の如く、耶蘇教聖書は、地球を照す太陽の如しと、然りと雖も、近世學術の進歩に連れ、聖書中理科學說と、矛盾するの點を、發見せしこと、僅少に非ざるあり、されど、聖書は固より太古住民に、理科の學理を教ふるの目的を以て、書せしものに非ず、又、歴史上の事柄に就きても、誤りあり、加之、其具に神の託宣に出しや否や、之を證するの法あり、但、吾人は聖書中、宗教上に關する事柄にして、正當なるを信せば、其餘は之を問ふの必要あり、此經典には、文法上、修辭學、及び論理學上に、於る誤、亦瑣少に非ざれども、是等は只、形体上の誤にして、教義の眞理あることを害せず、此故に、此等の誤を認るの士にして、此教義を信する者、亦頗る多し、舊約書は、皆口碑の蒐集あり、凡そ人として、誤なき者あり、故に人を經て、傳來せし教義、亦多少の誤りある固より、其所あり、聖書に於て、神は人を、犧牲とすることを命ぜり、是れ一見頗る疑ふ可

きの事あり、左れど神は之を以て、人をして神に捧ぐる、犧牲の標準とあり、深く悟る所あらしめんとせしのみ、其他舊約書中、一夫多妻、及奴隸使用の禁なく、且ダボテは悪人にして、神寵を蒙り、イスラエル人は、神命に由て、其敵を鑿す等、耶蘇の完全ある道徳に合せざる所あるを知る、左れど、神は一部の默示に由て、可成速に人民を導く、慈心に原くを思へば、更に疑ふ所あり、特に贖罪の義に至ては、新舊約書を通じて變ぜず、是れ耶蘇教聖書の特色と云ふ可し、之を要するに、耶蘇教聖書は、今後に於ても、全く信すべく、且信すべき價值あるものにて、世界人民、神聖なる生活を望むもの、最良なる模範と云ふも、過言に非ざるべし、云々、

次に紐育のロビーゴシエル氏「モーセスの豪傑あること」てふ論文を朗讀す、開會以來の名文として終始喝采を博し、續て紐育の人セント氏其他二三の演説あり、最後に八淵蟠龍氏演説す又喝采あり、

九月十七日

當日は、恰も神智學會員の顔揃とも云ふべき有様にして、孟買カルカッタ等より來れる辯士演壇の左右に副て相迎る、第一の辯士は神智學會員中有名ある、ユニーヨークのウイリヤム、キニー、ジャック氏なり、「オックルト」及び「エソトラリック」の事を熱心に演ず、事頗る怪なれども、辯論の巧なる、論理の井然たる、語氣の熱心なる、自ら聽衆の耳を傾けしめたり、夫れより博士ジエムス、博士アラメッタの諸氏、交代演説し、最後に登壇せしは、アンテーベザント女史あり、女史は接神學派の、女軍の首領にして、故プラバッキ女史の後身と云ふべし、女史が肩に掛たる上衣は、プラバッキ女史の形身と思はれたり、若し彼れ、狂に非ずんば、奇想天外に飛ぶの女豪と云ふべし、彼の演説は、人智を七段に分ち、進化の理を説けり、七段目、即ち最高の所に修鍊し至れば、人は、姿を包める「ラ

ンプ」なり、其中心は光明の源泉たる、永劫不滅の光輝に合すと云ふにありき、午后六時より、商業會議所頭取、チャーレス、ハミル氏の家に招かれて、晚餐の饗應を受け、氏夫妻と其子息六人、及び博士ポテイ氏に逢ふ、氏は内外七國の語に通じ、殊に印度錫蘭、亞弗利加の事情に精しと云ふ、

九月十八日

第一に登壇せしは、ケンタッキ州の大僧正ブラットレー氏、「ローマンカソリック」教に就て、殆んど一時間餘の長演説をなす、次にオハヨウ州の第一「プレスビテリヤン」教會の女教師某登壇す、演説は「女子の務」と云ふ題にして述て曰く、

雖か云ふ、男子は神父の榮光にして、女子は男子の榮光なりと、愛を以て充たされたる神父の前に立つとき、豈男女の區別あらんや、妾は今「フイ

ビイ女を以て神父の娘なりと云はんを欲す、天父自らよりは勿論、男女の差別なきも、時と場所と人の性質によりて、これが訓誨の道を殊にせざるべからざるは、理の尤も視易き所、何ぞ知らん、天、キリスト、フィビの一男一女を下して、吾人々類兩性に悔改の教を授けしものにあらざるなきを、天は其愛する男女兩子を遣はして、吾人に誠しめたるに相違なし、然るに今日の社會を通觀すれば、實に男子は神の榮光にして、女子は男子の榮光たる如き觀あるは、果して何の理に出るか、是れ妾の疑ふ所なり、妾等は、儀式的尊敬を愛るを止めて、精神的の尊敬を受け、彼れも我も、みな共に、神父の榮光と云はれんことを、務めざるべからず、云々、

次に顯はれしは、ハーバード大學教授ライヤン氏なり、朗爽なる音吐を以て大に猶太教と學術文明に就て氣焰を吐けり、續て釋宗演氏、最後にエッチ、ダンマパーラ氏等演説す、釋氏の演題は、佛教の要旨并に因

果法と云ふ、其大要を左に摘す、

諸君、宇宙の森羅萬象は、抑も何より出てし乎、蓋し心的二箇の元因より生せり、而して此の二箇の元因とは、即ち性情の二なりとす、性は吾人が本覺の眞性、萬物の住家となせる理体なり、大智度論に、一切の色法皆空分あり、諸法の中皆涅槃の性あり、之を法性と名くと云へり、情は吾人が不覺の一念、即ち妄想の異名にして、是を五情の所欲と云へり、又首楞嚴經には迷妄にして虚空あり、空に依りて世界を立し、想の澄めるは國土と成り、知覺は乃ち衆生とある、空の大覺の中に生ずるは、猶海の一漚の生ずる如しと云へり、換言すれば、萬物をして、生死の渦中に浮沈せしむる者は、實に不覺の妄念が係累をなすと云に外ならず、故に我釋迦牟尼世尊は、一切種智、三世洞觀の眼を以て、無量無邊の衆生が、善惡の二習慣に従つて、苦樂の報酬を受け、輪轉極りなき様を觀察し、玉ひ、其出世五乘

の道路を開拓し、一切衆生を導き、虚妄の習慣を退け、清淨圓滿なる大帝都に到着せしめんとて、此世に出現せられたり、(中略)釋迦牟尼佛は天眼を以て吾人の情感機根の善惡篤薄丈に方便力を以て宜きに從ふて法を演べ、或は五乗とも三乗とも、自由なる濟度を試みられたり、第一人乗、第二天乘、第三聲聞乘、第四緣覺乘、第五菩薩乘之を五乗と名づく、第三、第四、第五の三乗は佛出世の法と云ひ其法を以て超然として高く世俗の表に出で、情累の汚染を潔淨して、只眞如實際の靈域に向はしむ眞諦的の法門とす、前の人、天二乗は、所謂俗諦的の法門とす、如是佛一代の提唱は、頓漸半滿、大小權實と分れ、或は八宗十二宗と分れ、二千數百年の長日月、歐亞幾億の人民をして、順緣逆緣、驚くべきの活波瀾を性海に鼓動せしも、畢意轉迷開悟の彼岸に歸着せしむ、是れ我が佛の大目的あり、云々、

九月十九日

日蓮宗依頼人川合芳次郎ある人來る、本日は會場聽衆充滿、立錫の地を殘さず、是れ蓋し、大博士マックス・ミューラル氏の論文朗讀の日ありければなり、パロース氏、第一に英國貴族ソート女史の書狀を朗讀す、文辭流麗にして、其意四海同胞の初舞臺に序幕を開くものは、ミチガン湖邊、美術館内、世界宗教大會議なりと云ふにありき、次にロンドン大學の教授マイナス・シユラス氏登壇す、演題は「默許」と云ふ、曰く、余は歐洲大陸に於ても、當地に於ても、屢々此宗教會議を評して、ナイヤガラの大瀑布の如しと云ふを耳にせり、蓋し大なれども實効ありしと云ふの義あり、然ども、是れ未だ余の信ずる所を傷るに足らざるあり、吾人は茲に此會議の開會以來、世界各國宗教代表者諸君と、一堂の中に會し、其教旨の差異あるに關せず、洋々和樂し、互に相和し、相睦む、是を以て之を推せば、吾人が曾て世界中に、異宗教の并立する間は、能く四海同胞の

樂を望む可らずと信したることも、全く妄想に過ぎず、世人若し只愛を以て心とせば、四海人民の相和するの實を擧ぐることに、難事に非ざるべし、云々、

次にバルロース氏立て、大博士マクスマニエーラル氏の演説文を朗讀す、其意に曰く、

余の希望する所は、單に基督教の改良のみにあらずして、又其完全ある復活にあり、換言すれば、今日の學理の攻撃を受けて、避易遁逃せんとする如き、聖書に依らず、又教會組織に依らずして、獨立活歩の原泉に渴を醫するを務むるにあり、此源に溯れば、初めて世界各派宗教の儀式的、異様の假面を捨て、一に歸するを得べく、四海の兄弟始めて組織するを得べし、這般の大會は、此目的の到達を助る少なからざるべし、云々、

次に朗讀せられしは、第二「プレスビテリアン」教會のマクファーソン氏

の論文なり、題して「宇宙に於ける人の位置」と云ふ、曰く、

太古氷塊時代は、今を去る二千五百万年以上に及ぶ、其間榮枯盛衰せし、各種の人類頗る多きも、皆尊ぶ處、神を人に似たるものありとの説を持す、是れ決して妄説として輕視すべからず、吾人は人に依て神を知らざるべからず、神人常に相似たるの點あり、換言すれば、人の尤も善良なる時は神の如くにして、人の愚惡ある時は神が愛を注ぐの目的物となり、云々、

次に大學教授、マーウイン、メリー、スチル氏の論文朗讀あり、終てロンドンの神學者にして、名文家ある、ホーエイ氏「音樂と感情と道德」ある論文を朗讀す、氏外貌美ならず、身軀殊に矮小、五尺に充たず、其掖下に「ステッキ」を狹み、言論激し來りて思はず踊躍するの情、恰も一寸法師の舞踏に似たり、吾人をして嗚呼この一擡に足らざる小兵者にして、十

九世紀の文壇殊にロンドンに大勢力を有するかを想ひ起し、轉た感嘆に堪へざらしむ、曰く、

音樂の人の感情に勢力を有するは、皆知る所あり、而して感情は、又思想と相關連し、思想は舉措と相連繫し、舉措と行狀と相連り、行狀と道德とは離る可らず、故に音樂と道德との大關係あると知る可きなり、是を以て、音樂は感情、行爲、徳義を支配する唯一の活術ありと云ふを得ん、云々、

九月廿日

此日聴衆少なし、本日は回教のウヱブ氏「イスラム」の精神と云ふ題を以て述ぶる所あり、滿場ノウウの聲盛んに起る、氏は泰然として動かず、神色自若たり、彼れが一夫多妻を論し、一夫多妻は「イスラム」教條必要あるに非ず、「イスラム」教條が到るところに、一夫多妻主義を待くと思はるゝは、妄誕極まれり、一夫多妻は、我國及び吾人教理には、一大

汚點なり、然れども、或る他の場所に於ては、利益ある所もあらんと述べたり、彼れ又語を續ぎて、余も始めは、諸君と同感なりしが、今は翻然一夫多妻の有益無害なることを認むと述ぶるや、再度ノウウの聲起る、氏遂に口を箝して降壇す、

次に博士フイーールド氏の演説あり、又ジェームス、ブランド氏論文を朗讀し、伯爵ウオーストフ氏「獨逸に於る基督教の現況」と云ふ演説をみす、其要旨に曰く、

我獨逸は、汲々として新主義を出したる國なり、我國は實に改良國なり、當今宗教は、分裂して兩派となる、此際に當りて、我宗教者の運動、着々歩を進むるものあり、我國に於ける今日の國家問題は、國立教會にありて、教會は我邦政府より、一層大なる自由を得ん事を務めたり、日曜學校、日々益、盛大に赴き、教會事業一として、將來多望あらざるをみし、云々、

次に、日本同志社々長、小崎弘道氏の「日本に於ける基督教、其現況、其將來の希望」なる論文あり、フイラデルフィヤの博士ポードマン氏之を朗讀す、其大意に曰く、

基督教が日本に入りし以來、僅に三十余年、然るに驚くべき長足の進歩をなし、其信者の多き、宣教師が六十年を費やせし、土耳其よりも尙多く、其獨立教會の如きは、百年間に三倍の多數の宣教師が、布教に従事せし支那に於けるより、尙多く、我國に於ける基督主義の新聞雜誌、其數亦頗る多し、而して之が筆を取り、文を草するもの、管に名義上のみならず、實際上本邦人のみあり、而して日本人にして、基督教信者たるものは、實に我國諸種公益事業の獎勵者にして、復た我國に於る基督教の先導者たり、此短日月の間に於て、此の如き域に達せしもの、益し、我國を措て他に之れ有らざるべし、尙ほ我國に於る奇觀は、信者の數女子よりも男子に

多きこと是なり、初め基督教の我國に傳播されんとするや、人皆宗派の異同を問ふに暇あらず、又實に異同のあることをも知らざりしが、其後基督教の源泉は一あるも、其中の各派は、各、依る所を異にすることを知らるに及んで、初めて基督教信者は、合同一味たる能はざる所以を知るに至れり、然して其の執る所の主義狹隘なる者は、信徒の數甚た少く、其主義宏博あるものは、其信徒も頗る多し、余は信ず、後來東洋は勿論、西洋諸國に神の福音を宣し、其深意を知らしむるも、亦我國に於ける基督教なるべし、云々、

九月廿一日

印度佛教靈蹟回復に熱心ある本邦人、堀内靜宇氏より寄送の論文あり、博士パロース氏之を朗讀す、次に「ハーバート」大學教授ピーボディ氏、シカゴ大學教授ヘンダーソン氏、及びワシントン僧正キン氏、各自

其論文を朗讀せり、然るに不思議ありしは右三氏の論旨大同小異、其題は均しく資本と労働と云問題よりして、耶蘇教との關係を説き及ぼし、然も同日同席に於て之を聞く、亦開會以來の珍事なりし、續て壇せしは印度婦人ジエーセラフジー女史あり、印度婦人社會の實況を訴へて曰く、

妾に伴はれて一萬二千哩の天外異國に來れ、國土は廣大にして方言數種、上下隔絶す、然れども一齊に叫ぶやさしき婦人の聲を聞け、妾等は進まんとせり、智識を得んと欲して汲々たり、靈魂的の文明を得んと願へり、乞ふ來りて妾等を救へと云はん、云々、

次に蘆津實全氏「佛陀」と題して、三身の理、正覺不退轉のことを述べたり、其の要を摘めば左の如し、

抑も佛陀は法身、報身、應身の三身を具有す、報身あるものは修行の功力

により、悟を開いて佛陀の地位に至れるに名づくるものなり、佛陀は本來不生不滅なり、之を稱して涅槃と云ふ、かく涅槃に入りて佛陀の地位に至れる者は、此世に出現して一切の衆生に說法し、衆生を濟度することを得、之れ應身と云ふ、釋迦牟尼の如き是あり、次に佛陀と人間との區別を謂へば、元來佛と人間ある者は全く異りたる者にあらず、佛も本來人間なり、其修行の功力に依り完全圓滿の眞理を徹悟したる者あり、吾人人間は常に煩惱の迷夢に掩はれて、本性を悟る能はず、若し煩惱の迷夢を排開して佛性を悟ることを得ば、又た彼の釋迦牟尼世尊と同等の地位に至るを得る者あり、佛教は元來心を基本とす、此の眞空妙有ある心の本體を徹悟し給ふ佛陀は、一切の衆生を平等一視するの慈悲、天地間一切の現象を説明して餘ます所なきの智慧、王位、妻子、財寶を棄て難行苦行して其身を犠牲に供せしの勇氣、以上三徳を具備し給へり、次に



佛陀は聞者の智識の階級に應じて説法を垂れ給へり、故に初めは小乗の涅槃を以て教へられしも、其最後に於て高弟を集めて佛陀の本意を顯はし、大乘涅槃の真意を説き給へり、故に大乘は佛陀の本意佛教の本體なり云々、

九月廿二日

華盛頓府グランデン僧正先登、宗教と富に就て述ぶ、博士ジョセフ、マクドナルド氏宗教及び世界文明に對する耶蘇教經典の價値を論じ、印度のマドムダー氏世界は我東洋亞細亞に負ふ所ありと演じ、次で印度のダンマパーラ氏基督教宣教師改革の法如何を演説す、其略に曰く東洋人民は過去三百年間に「キリスト」教國民が吾人に對してキリストの命したる義務を成さざりしことを記臆す、吾國は諸君と風俗習慣を異にせり、屠獸殺生は佛教者の最も卑む所あり、諸君よ「キリスト」教をし

て東洋諸國に好結果あらしめんと欲せば、温和恭謙寛大なる宣教師を派出せしめよ、今日までセイロン、ビルマ、支那に於ける宣教師は只私利私慾にのみ戀々たり、故に下等人民の幾分を改宗せしむるを得るも多小の智識ある者は、一人も改宗せしむること能はず、之に反して我佛教が古來全亞に行はれ、モンゴリヤ人を感化せるは身粗服を纏ひ、口粗食を食ひ、一意布教に熱心せるの結果なり、佛教の感化力によりて屠牛場は廢せられ、妓樓酒肆は影を隱せり、然るに「キリスト」教輸入以來是ら不潔物年々増加の形跡あるは歎すべきの限りなり、是らの點に注意し、改良實行するは、博愛主義を有せる「キリスト」信者諸君の義務なり云々、次に天津より來りシカントリン氏、印度のヒューム氏其他數氏交々壇に上る、

九月廿三日

當日朗讀せられしもの「チャーチ、オフ、イングランド」の僧アルフレツ  
ドモメリー氏の論文あり、氏叱呼して曰く、

此宗教會議の結果は、吾人に教ふるに、世界宗教千差萬別なりと雖ども、  
此等は終に一致合体す可き事を以てせし、吾人の義務は、各人をして、世  
界宗教會議の或るものを知らしむるに非ずして、先づ彼等をして宗教  
あるものを知らしむるにあり、實に余は此主義を有し、之を擴張する事  
を欲するあり、抑も俗人の頑迷不靈なるは、吾人宗教家の盡す所、猶未だ  
足らざるに歸因せずんば非ず、而して吾人宗教家の頑迷あること、亦其  
自ら持する所高きに過ぐると、其無知あるとに基す、世界各宗教の創立  
者は、其教義を教ふるに書を以てせり、然れども今日に至りては、其宗教  
の教義も、變動を受けて、師祖の主旨と背馳する者、往々にして之れあり、  
今日の回教、佛教、儒教は共に皆敗爛せざるはなし、耶蘇教亦腐陳の教た

るを免れず、世人往々道德を輕んじて、宗教に比するに足らずとあすも  
のあり、然れども日常行爲を支配する眞の宗教は、單に道德の教に外あ  
らざるなり、故に慈愛を基礎とせる道德は、即ち宗教と云ふを得べし、宗  
教の要素は、只神を信認するに止るにあらず、若し人にして他を愛する  
心あくんば、何を以てか、神を愛するを得ん、苟も正當にして邪に流れざ  
るの行爲は、神の吾人に望むものにして、吾人が神に對して爲す所、  
亦之を措きて他に非るあり、余は將來、吾人が認めて無神論者とあす者  
の中に於て、却て耶蘇教信者と自稱する吾人よりも、正當の宗教家を見  
出すの期あることを、信ずるものあり、云々、

次に壇に顯はれしは、黒婦人ツアンニーウイヤム女史なり、題して  
「亞米利加に於ける黒人に宗教が與ふる所の賜ものは如何なるもの  
か」と云ふ女史の論文は、第一に黒奴賣買の盛んなるに當り、耶蘇教會

が、この不正手段を幫助するの媒介となりしこと、及び其當時、自由を箝禁束縛されし黒人が、天道の無情を怨み、天父を以て、暴戾無道なるものと思ふ事の已む能はざりしことを、明示詳述し、又此宗教は、奴隸制度公行を奨励せるのみならず、又攻城野戰、國土是れ奪ひ、異人種相食ひの惡弊を、妨壓せずして、却て之を進むるの器械たりしを切論し、終りに臨んで曰く、

耶蘇教徒は、其教祖の素志に法り、四海同胞にして、天帝の前に甲乙あるを信せば、進んで黒人の爲に、社會上補翼する所あるべからず、焉が弱肉強食の、野蠻的煽動者とあるを得んや、人に貴賤進否の差別ありと雖も、我身に於けるが如き、愛と誠とを以て、等しく之を推すべきは、耶蘇教信者たるものゝ義務なり、當今に至りては、世間黒人に對して、同感の士頗る多く、若し黒人を其教會員に加へざる如き、教會牧師あれば、之を攻

撃非難するに至れり、抑も黒人種に傳道の爲、送られたる宣教師の成效せざるは、單に黒人種の頑迷なる爲めにあらずして、彼等自から愛と誠とを欠けばあり、眞の道は一のみ、同じ眞の道を求めながら、兄弟相闘ぐもの、蓋し弟たる者の罪にあらずして、兄たる者の徳行に全からざる所あればなり、諸君人を治めんと欲すれば、先づ自ら治めよ、然らば黒人、紅人、黃人、みゑ諸君の兄弟姉妹として、眞理の一堂に、相團欒の樂を享けん云々、

九月廿四日

日曜日なり、本日も樓上樓下、聽衆充滿して立錫の地あり、辯士五六名、其中尤も著るしきものは、ワシントン府「カソリック」大學教授「ファザ」ア、オーゴン氏、及び「ユニヨリック」市の「マーブルゴレシエート」教會の牧師、神學博士「セームス、パレルル」氏あり、オーゴン氏は「ローマンカ

ゾリック教信者にして、劈頭第一に曰く、  
 諸君、白亞城に行て、コロムブスが乗り來りし船を見よ、彼船は實に「ローマ  
 マンカゾリック」の種を初め持ち來りしあり、亞米利加は、初めて「ローマ  
 ソカゾリック」の徒によりて發見され、亞米利加國是の根原、亦「カゾリック」  
 教に依りて定めらる、今や「ローマンカゾリック」とし云へば、甚た耳障り  
 に感ずる者もあれども、余が所謂「ローマンカゾリック」とは、偽善的腐敗  
 的の「ローマンカゾリック」に非ずして、清淨なる「カゾリック」教あり、否な  
 真正なる「エスキリスト」教あり、この教や吾人に信教の自由を與へたり、  
 亞米利加獨立の精神たり、奴隸解放の主唱者たり、憲法の神髓たり、教育  
 の根原たり、大統領「クリーヴランド」氏は、先年羅馬法王に送るに、當國  
 憲法一部を以てし、我國民、眞の愛國者たる者は、眞正の「カゾリック」教を  
 右手にし、憲法を左手にして、働かざる可らずと云へり、(中略)「カゾリック」

教は、この共和國に於ける、法規秩序の最も強き根柢にして、又最も米國  
 に適合するものあり、故に若し亞米利加にして、他日孤城落日、半旗の翻  
 をたるを見る如きことあるも、凱歌を奏するものは、「ローマンカゾリック」  
 教あるべし、云々、

次に「パール」氏登壇演題は、亞米利加に及ぼせし宗教の力と云ふ、曰  
 く、

吾人は、常に神に感謝すべし、蓋し神は吾人に其愛子を與へて、教を與へ  
 たればあり、此教傳へて今日に至り、殊に我國に於て、光輝愈盛なるを見  
 る、凡そ情慾の不清を焚き、煩悩の不淨を滅ぼす、火力あきものは宗教に  
 あらざるなり、吾人は實に、此火によりて、吾人の罪を焚かざる可らず、基  
 督教は、我米人思想の本源にして、此精神的滋養物なくんば、吾人一日も  
 安んずる能はず、佛國の名家「トングイル」云へるあり、世界中亞米利加は

ど耶蘇教の必要なる國を見ず、其人民の精神を形成するものは、實に耶蘇教なりと、嗚呼、吾人をして、真正の耶蘇教者たらしめよ、只言論上の耶蘇教信徒たらずして、實際上徳義完備の耶蘇教者たらしめよ、ウエプスターも云へり、余が理論も余が叔父の日常の徳行を見るに及んでは、又一言の云ふべきあしと、諸君吾人をウエプスターの叔父の如くあらしめよ、徳孤あらず必ず隣あり、云々、

九月廿五日

十時會場に到る、樓上より寫眞を撮る、本日は氣候殊に寒く、六十度以下なりと云ふ、當日の辯士は、支那天津より來會せしカントリン氏なり、軀幹五尺に充たず、身に支那服を着し、頭を髮に結びし様、一見支那人の如し、其非常ある熱心は、以て聽衆を感動せしむるに足れり、其説く所は、支那に於ける宣敎事業の成行あり、氏曰く、

支那人は一般に、完全の宗教を望むこと、大旱の雲霓を望むが如し、孔敎支那を益する頗る多し、然れども尙足らざる所あり、故を以て此時に當て、天父の賜たる真正なる耶蘇教を以て、彼等を養ふは、最も適當なる一大事業と云ふ可し、人動もすれば云ふ、耶蘇教と孔敎主義は、全然相反し、一大衝突を來さんと、然れども、此衝突や、醒風血雨天地暗澹たる者に非ずして、將に大徳を以て小徳を收め、大光を以て小光を吸収するのみ、相戦ふに非ずして、相和するなり、相論するに非ずして、相談するのみ、此二敎義の合併は、支那に於て敎義的改良の紀元あり、此紀元は四海同胞主義實行の緒あり、云々、

氏の説く所、敢て新あるに非ずと雖も、其熱心と其支那内地に於て、嘗めし辛酸とは、能く聽衆の同感を得て、斗らずも天地を震動するの喝采とはあれり、

午后印度シェーン宗代表者、ガンダイ氏登壇す、氏は學者にして、最も  
 法學に精し、其演題は「シェーン宗綱領」と云ふ、彼れ終に絶叫して曰く、  
 先日ロンドンのペンラコスト氏は、我宗及び我寺院の僧尼を以て、不道  
 徳、不品行なりと云へり、本會は、四海同胞の端緒を開くの會たるを知れ  
 ば、余は敢て彼れより非議せらるゝも、我より反駁するの不當なるを知  
 れども、事一宗の耻辱に關するを以て、一言之を雪がざるを得ず、真理な  
 りと自ら誇れる、基督教信者、近來何ぞ夫れ自稱ポールの多きや、此等の  
 自稱ポール來りて、印度に名を上げんとすれども、遂ぐる能はず、却て百  
 方之を非議し、我宗教信者に負はするに、不品行の汚名を以てす、嗚呼濁  
 流滔々たるの天下、豈夫れ偽善者あからんや、我印度、殊に南部に於る、シ  
 エーン宗教信徒中、不品行あるもの、蓋し之れあらん、然れども是れ教義  
 の然らしむる所に非ず、彼等は真正の宗教信者に非ざるあり、又彼れが

云ひし如く、我宗は醜業婦女を、我寺院内に横行せしむるものに非ず、巍  
 然たるヒマラヤ山よりコモリン海峡に至るまで、真正なる我「シェーン」  
 宗信徒中、斯の如き敗徳のもの一人も有ることあし、諸君乞ふ漫りに辯  
 を弄するものと爲めに誤らるゝ勿れ、試に余をして「アッパール大帝傳  
 記」の一節を引用せしめよ、昔し回教徒の巡禮者の一隊、船を買てメッカ  
 に到らんとせり、途中ホルチユガル賊船の掠奪する所とあり、而して  
 其分捕物中、回教經典數部あり、ホルチユガル人之れを犬の首に掛けて、  
 市中を奔逸せしめたりしが、後土耳其古帝「アッパール」の臣下、此「ホルチユ  
 ガル」人を捕ふるに當て、回教經典を得たり、太后之を聞き、帝に謂て曰く、  
 汝亦耶蘇教聖書を取て、之を犬首に掛け、以て此愆に報ふ可しと、帝は其  
 最愛なる母命を聞かずして曰く、彼等は回教經典の眞價を知らず、故に  
 此暴行あり、吾は回教經典、及耶蘇教聖書の價值を知るを以て、彼等の行

に倣ふ能はずと、何ぞ夫れ其見識の高尙あるや、若し之をして局量狭小、見識淺くして徒に誇大の言をあさんことを勉むる輩に聞かしめば、彼等は、蓋し愧死すべし、夫の自ら尊んで、他を卑ふするが如きは、正に其徳の足らざるを表示するに足れり、云々、

九月廿六日

午前十時會場に赴く、第一に登壇せしはシカゴ大學教授ウイリヤム、  
シー、ウイルキンソン氏あり、氏は他宗教に對する基督教の様子と云ふ演題にて、述て曰く、

シーザスは、ジュース人を除くの外は、一切の宗教の説く所は、虚誕あるを示せり、勿論如何なる宗教も、種々ある真理を含有するに相違あるも、基督教の如き完美せるものはあるからん、云々、

當夜は、コロンピヤンホールにて日本支那人の佛教演説ありたり、

九月廿七日

閉會式に臨む、午前七時宗教會館前、群衆雲霞の如く、其雜踏一方ならず、門戸を鎖し、一隊五百人宛を入れしめたりしが、余等は、掛員の案内にて、裏門より入場する事を得たり、午后八時、コロンピヤ會場の大なるを、樓上樓下表裏共、立錐の地なし、此夜入場料三弗迄暴騰せしと云ふ、當夜祝辭を述る者廿六名、余の祝辭は例の議長、代りて演ぶるや、滿場喝采湧くが如し、又裏に至れば、矢張聽衆數千人、立錐の地なし、書記某代り讀む、拍手喝采前に倍す、十一時頃、閉會とありたり、  
左に、數氏の祝詞を摘載す、

第一 ロンドンのモメリー氏、

天下誰れか一人の仕事として、パロース氏の如き、大事業をあせし者あらんや、蓋し空前絶後と云ふべし、本會を起すに就き、亞米利加人が、先登

第一たるの功は、竹帛に垂れて没すべからず、亞米利加既に空前の大博覽會を開きし榮譽を荷ひ、今又精神的先導者の榮光を受く、後來益々諸方に此種の大會あるべし、亞米利加が先鞭たりしと云ふ功名は、永世不朽ならん、亞米利加萬歲、シカゴ市萬歲。

#### 第二、印度マヌムダー氏、

諸君、此の騷擾掬すべきの宗教大會議も、いよいよ、今夕限り終らんとす、吾人は、朝夕旦暮、他事を抛て、十七日間諸君と此所に相見へ、相喜びしが、最早今夕限りと思へば、轉た愁哀の情に堪へざるあり、然れども天帝は一なり、濟度は一あり、山海萬里を隔つるも、希くは彼れに依て、消息相通ぜん、諸君萬福、

#### 第三、露國皇族ウオラスキー殿下、

諸君、余が此會に臨みし以來、滿幅の赤心を推して、諸君と共に喜怒哀樂

の同感を表したりしが、本會も茲に其成果を告げられたれば、今後は四海萬民相愛の兄弟たるの日を、屈指相待つべし、人は曰く、亞米利加の天使に、魯西亞の猛獅と、此の天使と、此の猛獅と、相會し、相助け、相樂む、何の快か之に如かん、余は人種の異同を問はず、兄弟として相樂まん、會長萬歲、諸君萬歲、

#### 第四、支那書記官彭氏、

諸君、余は宗教大會に臨むもの、豈諸君に今日までの優遇を謝せざるの理あらんや、貴國の保庇に浴する、我國人、正直遵法のもの多し、基督は吾人に教へたり、汝自らの兄弟を愛するのみならず、又博愛なれど、汝に出る者の汝に歸る、希くは彼等をも愛せよ、諸君若し我國に來らば、上流社會より余が諸君上流の人に受けしと、同一の歡待を受けん、余は兩國の惡感情、晴れ去りて、提携相助け、兄と呼び、弟と喜ぶの間柄とならんこと



を希望し、諸君の幸福繁榮を祈る。

第五 平井氏

大會漸く終らんとす、寒天將に襲ひ來らんとす、吾人は久しからずして、貴國を去らんとす、去るに臨んで、敢て諸君に受けし優遇歡待を謝し、併せて此大會の成功を來せし、諸君の盡力と賛成を祝し奉る。

第六 柴田禮一

滿場の淑女、並に紳士諸君、余は今日の閉會に當り、諸君が余の爰に着せし以來の優遇歡待に對し、一言の謝辭を述べんと欲す、諸君は余の卑論を賛成せられ、同感を表せられ、新聞記者は筆を禿して、余を稱揚せらる、余の面目何を以てか之に加へん、余は喜ぶ、余が宿志虚から

ずして、此の宗教大會の席末に列するを得たるを、又悦ぶ、世界各國、諸の大宗教家、大學者が演られたる、四海同胞、博愛主義の高論卓説を聞くを得たることを、余は又更に感ず、善良の教育に服せる滿場の聽衆諸君が、温然たる虚懷を以て、能く他教の異説を聽取せられたるを、余が此の十九世紀歴史上特筆大書すべき、完美全盛なる、此の宗教大會議に臨場し、諸君の面前に立て、卑見を陳べ、諸君の賛成を博したるは、實に畢生の名譽なり、又諸君が深く余を愛せしは、實に望外の光榮なり、然れども顧ふに、諸君は死して朽つべき肉躰の柴田禮一を愛するにあらずして、必ずや余が多年胸中に蓄藏する、

一視同仁の精神を愛するなるべし、果して諸君が誠意  
 余の説を愛取せられたりとせば、余も亦一言之を感謝  
 せずんばあらざるなり、諸君願くは、余をして茲に此の  
 米國と、我日本との關係如何を説かしめよ、我國人は元  
 來進取の氣象なきに非ざりしも、舊制度の硬なるが爲  
 め、今より四十年前以前の我國人は、悠々寛々、四海波靜か  
 なる所に熟眠して、曾て全世界の大勢を知らざりき、然  
 るに貴國々民の至懇至切の真情を代表する、水師提督  
 ペルリ君が、鐵艦萬里の鯨波を蹴て、我が堅く閉鎖せし  
 浦賀海門の重鎗を開かれたるが爲めに、我が國民は幸  
 に十九世紀の物質的文明の光輝を受くるを得て、以て

今日開化の盛運を致せるなり、是れ偏にペルリ氏の賜  
 なることは、永く我が青史に傳へて炳焉たり、我國は貴  
 國と海洋を隔ること五千里、四十年前は人間の航通  
 し得べき所にあらずと思惟したるも、今や僅々十有三  
 日を以て容易に渡航することを得て、我國人は一般に  
 貴國を以て比鄰となし、貴國人民を以て無二の良朋善  
 友となすに至れり、誰れか我が爲めに之れを媒するも  
 のぞ、ペルリ提督其人なり、誰れか兩國交信の厚きを加  
 ふるものぞ、貴國全般の兄弟姉妹是れなり、此の好誼に  
 對し、余は貴國人の恩義に酬ゆるの道を知らず、只僅に  
 之を償ふの一方は、余の身軀を抛ち、肝膽を披きて、此の

眞理の一堂内に、同胞兄弟の情を表するにあるのみ、諸君は夙に團結の勢力を知る者なり、余不學日本語の外語ること能はずと雖も、諸君と共に、我が一大目的を成就せんと欲する熱心は、即ち貴國人の好誼に酬ゆる所なり、初め余の當國に來らんとするや、千障萬碍交々襲來りしも、幸に之れと戦ひ、之れに勝ちて、諸君と茲に相見るを得たり、是れ一に天神の加護に依らずんばあらざるなり、但し余を以て日本全体の神道教を代表する者と誤認する勿れ、余が代表する所は、則我實行教に止まり、我が代表は神道數種中の一派に過ぎずと雖も、天下何物が四海同胞の主義に背違する異教あらんや、何

物が一視同仁の主義を破壊する邪道あらんや、日月天に輝くの間、何宗何派を問はず、互に眞理を楯とし、堅忍を銚とし、以て此の大快事業を仕遂げんことを誓はん、余は今日相別るれば生前復た諸君と相見るを期すべからず、此の別或は生別死別を兼ねん、然れども諸君の靈魂と、余が靈魂とは相合せり、此の心は千歳變ることなかるべけん、諸君も亦永く之を記憶して忘るゝとなからんを望む、茲に地球の腦髓たる、我邦富嶽の高きに在ります、三柱の大神に對し奉り、永く貴國の隆盛と諸君の幸榮とを祈禱し、閉會の祝辭を兼て、告別の辭を述べ、

第七 天津カントリン氏

第八 ダンマパーラ氏

諸君、余が受けし好意優遇に對して、四億五千萬佛徒の爲めに感謝す、諸君忍耐して佛教の話しを聞けり、尙ほ進んで聞き、學び修めよ、敢て會長秘書官諸君の幸榮を祈り、諸君の萬福を望む、

第九 ……

第十 印度ガンダイ氏

第十一 アフリカのプリンス演説(以下略之)

最後にパロース氏の謝辭あり、左の如し、

余が友ダンマパーラ氏云はく、天帝の感喜シカゴに集まれりど、又モメリー氏曰く、余はシカゴの満場の喜樂を天帝に達せんことを望むど、實に然り、余は天帝の神護により、此の世界各國大會を催し、此の大會の成

効を致せるを喜ぶ、今や閉會の際に當り、愁嘆希望交々逼る、今日諸君の贊助を以て成効あるは、三年前より余が上に立て、其指揮を受けし會長ボンネー氏の功果に依る、是れ決して忘るべからず、希くは彼れに謝せよ、云々、茲に各國代表者の恙なく、歸國あらんことを祈り、併せて其萬福を祈る、

世界宗教會演説摘要終

## 附 録

今回米國シカゴ府に開設せし、閻龍世界大博覽會は、社會文明の進歩と共に開けたる、宏大壯麗の奇觀にして、其會場には、世界各國の出品を網羅し、實に十九世紀物質的文明の萃美とも見るべく、之に加ふるに、博覽會附屬として、無形的世界宗教大會議を開設して、世界各國の異宗教家を會同せり、余は其評議員に撰まれ、所謂千里を遠しとせずして、此會場に臨み、十七日間の會議も無事終りを告げ、不日歸朝せんとするに當り、此大博覽會に渡米せし我國の人々は、余等を招待して、頗る優遇せられたり、而して余に一場の國語演説を乞はれたるに、余も聊か感ずる所もあり、たれば、其乞ひに應じ、左の演舌をなせり、其大意は、

人の他郷に在て甚だ悦ばしきものは、同郷人に相遇ふ

に若くはなく、一國の内にてすら尙且然り、況や萬里の海陸外國に孤客たる者に於てをや、今日余は此の米國シカゴ府に孤客たり、而して我國多數兄弟諸君より、懇篤なる招待を受け、大博覽會場中最も美麗なる、此の「ニユー・ヨーク」集會堂に開かれたる、懇親會に列し、併せて又、各國の淑女紳士と相見ざるを得たるは、實に欣喜に堪へず、深く發起者諸君に鳴謝する所なり、茲に一場の國語演説をなさん、余は突然演すべき旨を知らずと雖も、一言以て諸君の芳情に酬おさるべからず、我徒宗教家の萬國宗教大會議は、一昨日を以て首尾能く閉會し、此の閣龍世界大博覽會も亦今より一月餘にして閉

場を告ぐべければ、諸君も遠からずして目出度歸朝せらるべし、因て余は一首の古歌を引き來りて、余の感ずる所を演べんとす

敷島の大和錦に織りてころ

から紅のいろもはへあれ

此の歌は、光格天皇の御製なるが、如何に唐紅の美麗なればとて、紋章其他舉て彼を學ふは、不見識の甚しき者にして、之を我邦特有の大和錦に變りてころ、唐紅の色も見所あるべけれど云ふ意味を以て、漢學に心酔せし腐儒輩が、彼を指て中華と稱し、自ら東夷と呼ぶなどの不了見を戒め給ひしなり、此の歌の意は、宗教家我々は

勿論、商工業者諸君の上にも、應に服膺せらるべき事ならんと思はる、即ち諸君が二つなき身命をも顧みず、貴重なる金銭をも吝まず、波濤萬里を渡り來て、大博覽會場に臨み、皓寒剪るが如く、炎熱燬くが如き、艱苦を耐へ忍ばれたるは、一に諸君が頭腦を、全世界の物質的文明の光彩に染浸して、我日本に歸り、大に國家を利せんとするに因らずんばあらざるなり、又余が此度當地に渡來し、十七日の間萬國宗教大會議に臨みたるは、亦各國無形的の異宗教間に我が教義を出品して、互に未發の利益を交換せんが爲めなり、凡そ人間世界の事は、有形物と無形物と相俟て活用するものにして、例へば有形

の地は無形の氣を受けて、萬物を發生し、人の有形の肉体は無形の靈魂有て活動するが如く、諸君が有形の事業と、余の無形の宗教との關係の親密なる、亦知るべきのみ、今後は諸君が有形の上浸染し得たる唐紅も、余が無形の上浸染し得たる唐紅も、同様に本國に携帯し歸りて、我が日本帝國の大和錦に織り出さんことを勉めざるべからず、然して此の次の萬國博覽會には、更に一層の燦爛たる光輝を添へんことを希圖するの外、余は諸君に望む所なく、茲に今宵の款待を謝し、併せて諸君の安全歸國あらんことを祈る、

左に記する一項は世界宗教大會議の發企人バルロース氏の小履歴  
と題して彼の地某新聞に掲載したるを抄譯したるあり、

神學博士デヨン、ヘンリー、バルロース氏の小履歴

世界宗教大會開設の大事業を企てし博士デヨン、ヘンリー、バルロース氏は、齡僅かに四十有六、第二「プレスヒテリヤン」教の牧師として、職にありこと茲に十二年なり、知る可し、氏が富贍なる才氣と、正直の氣質之が素となるものあるを、氏は「ミチガン州メヂヤ」に生る、其兩親は「ニューイングランド」の人あり、氏は「オリウエト」大學に入り、發奮功成りて千八百六十八年業を卒ふ、在校中の成績殊に宜しく、文學史古代の典籍を愛讀し、夙に嶄然として頭角を顯はしたり、後ち轉じて「エール」「ユニオン」「アントガアー」の諸大學に入り、時の諸賢に就て専ら神學を修め卒りて「カンサス州」に於て、宣教及び教育事業に従ふこと二年半、次で「イリノイス州」

「プリンクティールド」に於ける、第二「コングレゲーシヨン」教會にありて説教師となり、止る事滿一年、間もなく外國を旅行すること十二ヶ月間、其間「巴里」に於ける「亞米利加人説教所」「エリオット」に足を駐め、幾多の名士と刎頸の交を結び、亞米利加に歸り「マッサチユセツト州」なる、「ローレンス」に於ける「コングレゲーシヨナル」教會の牧師となり、轉じて「東ポストン」なる「マヴェリツク」教會に入り、遂に聘せられて「シカゴ市」ある第一「プレスヒテリヤン」教會の牧師となる、此時に當り、氏窮厄の中にありて、此名譽ある招聘も將に應ずる能はざるの有様なりしが、氏に心を寄するもの五千金を送りて其の急を救ひ、遂に氏を迎へぬ、知るべし、氏が名望の尋常あらずりしことを、氏一度事業を企つるに當つてや、千障萬碍、撓ます、屈せず、斃れて後止まんとす、其有爲の氣性と徳望とは以て其成功を飾るに足れり、千八百八十一年十月以來其教會に名を列するの信



者實に千二百名の多きに及ぶ以て其有力の教師たるを知るに足るべし、氏は又演説家及著述家として藉々たる名聲あり、氏が演説中「サミュエル・アダムス」「ジェームス」「ラッセル」「ローエル」「ジョン・スチュアート・ミル」「レムブランド」「シエルサレム」及び「シエキスピヤ」は最も著名あるものとして數へられぬ、其今日迄著述せし物には「福音は真正の聖書あり」「國と兵」「文學界」「歴史の完成」「マーチニール」「ニール」「宗教は人智進歩の動力なり」等あり、氏は去る四年間其信徒の幫助により、中央音樂會堂にて日曜説教を開き居りしが、其功果大に著るしきものあり、氏は又實に此驚くべき世界宗教大會議の主動力者たり、この大會は氏が多年の希望にして、苦辛の功空しからず、今や成就を告げんとす、氏の得意想ふ可し、此大會議は終に能くシカゴ第二「プレスビテリアン」教會の牧師をして、現世紀の亞米利加に於ける尤も有名なる法教師とはあしりぬ、

明治廿六年八月十九日米國郵船「チャイナ」號に乗り横濱を解纜して

見かへれば船の煙のすゑかけてかすかにありぬよこはまのうら  
航海船中にて

月も日も波より出て波に入る船はうきよのいつこゆくらん  
あれぬれば船の窓打あらなみもうさねのゆめにさゝあかしつゝ

同月卅一日の朝遙かに桑港の山影を見て

遠眼鏡をるもひさす人もありかりほるにやの見ゆそめしより

桑港の大旅館「パリスホテル」に宿りて

雲をぬくはりすほてるにやどりても草のいはりの夢はむすひぬ

高低ある桑港の市中を自由に往來する「ケーブルカート」と云ふ車に  
乗りて

馬もなく煙もたてぬ小車のをりのぼりするあめりかの市

桑港よりシカゴに行道程二千余里を五晝夜も瀟車にて馳するど  
き

あめりかは野ゆき山ゆきまかねちの車もかそき心地こそすれ

シカゴ府は新しき都にて家の建築もいと宏莊に立連らねたれば  
人の上に人またすみてあめりかの都は空も都なりけり

シカゴミチガン湖畔の美術館内に設けたる宗教大會議場の正面  
の壁に我富嶽の軸を掛られたれば

富士のねの高き教を移し見よしかこの湖のひろきこゝろに  
いつ見てもかはらぬ富士のいやたかき姿を人のこゝろともかな

世界宗教大會の何の故障もあきを喜びて  
とりくの法の舟楫ましてもしかこの浦は波靜かなり

萬國大博覽會を見て

開けゆく國の姿を寫し見るしかこの湖はかこみありけり

歸朝の節布哇國ホノル、島に船泊りして

ぬやひあく君をへたつるはのるゝはねやにもつらき人やすむらん

船中にて印度の佛徒タンマパラと物語せしをり

さとりきとゆるす心は法の山なほ雲かゝるふもととなりけり

歸朝の船中遙かに富士の姿を見て

富士の峰の見えそめしよりうき船のうさもつらきも忘れにけり

少女の話

余が萬國宗教會の最終日に臨席して告別の演説(前に記する第  
三回の演説)をあしたる  
時は聽衆感動前回よりも強かりけん堂上堂下、幾千の男女、總立どあり

て拍手喝采の末、女子の一群は吶喊を爲して四邊より推し來り、余を擁して接吻握手の煩、復前日の比に非ざりし、而して幸に議長書記官等に救ひ出されて其休憩室に入るや、間もなく案内につれ入來る妙齡の少女あり、花顔才貌、慇懃に余に面會を請へり、其名を問へば只マリーと答ふるのみ、然して少女は熱心に余が手を握りて、今の演説に深く感歎したる旨を述べ、辭の端に數ある如妻までが、公衆の中にて、莫大の光榮を得たりと云へり、余之を解せず、其所以を訊ぬれば、何ぞ料らん、此少女こそ余が演説に繰返して我日本の大恩人との謝辭をなしたる米國水師提督其人の正しく孫女にてあらんとは、少女は更に語を續て、地下ある祖父ペルリの靈魂も、必ず深く師の演説を感謝せんと述べ、眼中喜びの涙をたゞ、にて余に敬禮を施したり、余も亦其奇遇を喜び、又少女の才氣ペルリの孫女たるに耻ぢざるを感賞せしかば、後の紀念にもと寫眞

一葉を附與して別れたり、遂に記して附録の一材となす。

明治二十七年一月廿二日印刷  
明治二十七年一月廿五日發行

著者兼  
發行者

柴田禮一  
東京市牛込區東五軒町卅八番地

印刷者

熊田宜遜  
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

印刷所

熊田活版所  
東京市神田區錦町三丁目廿五番地

發行所

實教本館  
東京市牛込區東五軒町卅八番地

